

「家の名」をめぐる民俗学的研究

柿本 雅美

序章

本論は、屋号、通名、苗字を「家の名」¹として捉え、それぞれの関係性や個人名との関わりを分析することにより、「家の名」が地域社会の中でどのように位置づけされるのか、家意識の問題を交えながら論じることにある。

屋号は個人ではなく、家を指す時に用いられ、地域社会のなかで共通の認識を持って家々を区別する名前であり、家の系譜を示すことのできる名前である。早川孝太郎や最上孝敬によって、早くから民俗学における研究対象として取り上げられたが、屋号の分類を主にしたものがほとんどであった〔早川一九三一、最上一九三七〕。その後、屋号は村落、家、地名、言語などを探る要素のひとつとして扱われることもあったが、研究そのものの数は多いとは言えない。

屋号は「家の名」として、家の歴史を語り、家意識が表出されるものであると考えられる。さらに地域によって屋号の性格は異なり、屋号が持つ情報は多岐にわたる。地域社会における屋号とは何か、屋号を通して何が見えるのかということについて明らかにすることにより、村落研究、家研究、地名研究の材料になると考えられる。そこで本論では、屋号が地域社会の中でどのように位置づけされるのか探っていくことにする。そのためにまず、近世から現代という長い時間軸のなかで屋号と同等の働きを有する通名、苗字との関わりから考察し、屋号の実態について分析していく。近世において通名は、苗字を公称できない庶民において家の系譜を表わし、家督相続の際に受け継がれていく名前で、代々襲名する名前である。そして、苗字は明治期になって庶民にも公に名乗ることが許された地域社会の外においても有効な名前であり、家と個人の両方を指す働きを有するものである。屋号は近代の名前に関する数々の法令が影響し、苗字が使用されるのと同じ時期に、個人ではなく家を指す呼称として、集落内の家々のみを区別するという機能を持った名前として成立する。明治期に成立した屋号は、近世以来長く使用されてきた通名が変化したものであり、苗字と共存してこれまで使用されてきた。しかし、屋号、苗字、通名はそれぞれ関係しながら成り立ってきたにも関わらず、個別に研究が行われ、また近世から近現代と

連続性を視野に入れた研究が進められてこなかったことが指摘できる。そこで本論では、屋号、苗字、通名を「家の名」とみなし、地域社会のなかで共通の認識を持つて家々を区別する名前、家の系譜を示すことのできる名前として総合的に研究を進めていく。

「家の名」の関係性を探っていくなかで、個人名との関係を無視することはできない。出生時の命名によって屋号と同じ個人名を持つ人、屋号に因む個人名を持つ人が少なからずおり、個人名に屋号が取り入れられている。このような屋号に因む名付けは祖名継承法による名付けと結びつく。祖名継承法は、何らかの関係にある先祖の個人名の一部、もしくは全部を継承して子どもに命名する方法であり、また、特定の先祖の名をとつて子どもに命名することが正常な子どもの社会的地位を示すと考えられる命名法である〔上野一九八二、二四九～二五〇〕。さらに、個人名は屋号の生成にも影響を与えてきた。屋号と個人名は相互に影響を与えあってきたにも関わらず、両者を関連付けた研究は行なわれていない。これを踏まえて、近世から近現代にいたる長い時間軸の中で子どもの名付けと「家の名」の関係についても論じていく。

また屋号は家の系譜を示すという点や、「家の名」として分析することで近世から現代にいたる家の連続性を追うことができるという点から、屋号と家の関係性についても見ていく必要がある。竹田

且は家を「家族によって営まれる生活共同にもとづく文化的・社会的な組織単位」であると定義づけ、家族については「夫婦・親子関係を中心とする血縁的で、しかも最小の集団単位」と定義した。家は家族を含む包括概念であり、家族は短命であるのに対して家は永続を願望されるものと述べている〔竹田一九七〇、六〇七〕。

屋号は、家の成員が抱える自家に対する家意識を対外的に表出するものであると推測される。清水昭俊は、家は仏および生きた成員によって担われているが、その成員の次元とは別個の次元に位置する自立した存在としての認識像があり、それを象徴的家と称した。そして家の内面的構造は、象徴的家、仏体系、地位構成などの諸次元にわたる諸要素の複合体として文化的に構成されていると述べている〔清水一九八七、二〇六～二一七〕。また「家は多元的な存在であつて、それゆえ家族や世帯や家業経営体などではなく、家を家と理解する限りは、分析よりもむしろ総合を主たる方法とするべきであろう。家を包む込む外的・公的領域——同族団、親類、村落共同体、政治的・経済的体制、法等——からの規制、この規制に相對する「制度体」〔中野 1987-81:107〕²としての象徴的要素——家の意識、屋号、姓、家紋、祖先祭祀等々——、家の政治的、経済的、社会的機能、そしてこのような家を担う成員の構成と動態、これら家という事象に含まれる諸要素間の相互関連は、記述的な事

例研究では全体にわたって取り上げられていた〔中野 1978:81、有賀 1967a〕³ものの、理論的には限られた要素間の分析的な考察に限られていて、家に関与するイデオロギー的、政治的、経済的、社会的、そして物的な諸要素間の相互関連が、全体にわたって理論化されるには至っていないように思われる。このような諸要素間の相互関連の全体を家の文化的構成と称するならば、この文化的構成が今後の家研究の主要な課題であろう」と述べている〔清水一九八七、一五一〕。清水は象徴的家の要素として、家意識や屋号を挙げている。家意識は実体のない概念であるため、これまでの研究においても家意識を具体性のあるものではなく、抽象的なものとして捉えられてきた。そのため家意識を持つ主体は誰であるのか、それは誰に対するものであるのか、また家意識は何に、もしくは誰にどのような作用するのかがということが明確ではなかった。しかし、清水は象徴的家の要素として家意識と屋号を並列に扱っている。屋号が自家に対する家意識を対外的に表出していると考えることにより、実体のない家意識が具体的に表出されるものとして屋号を捉えていく必要がある。また、家意識と屋号の関係性について取り上げていく本研究は、近年低迷する家研究の進展を見ることにもつながると考えられる。

第一章「「家の名」をめぐる研究」では、まず屋号研究を整理し、

課題設定を行なう。屋号は、これまで各地における事例報告が主となり、分析はあまりなされてこなかった。そのなかでも、一集落やその周辺地域という狭い範囲を事例とした研究がほとんどを占めている。屋号の成立について集落内に同苗字の家が多いため、これを区別するために成立したという曖昧な説明が用いられてきたことを問題として挙げられよう。また、出生時の命名によって屋号と同じ個人名を持つ人、屋号に因む個人名を持つ人が少なからずおり、個人名に屋号が取り入れられている。その代表が祖名継承法による名付けであることを踏まえ、祖名継承研究の研究史の整理と問題の抽出を行なう。そして、これまでの家研究を概観し、家意識研究の整理を行なううえで問題を抽出していく。

第二章「家の名」の成立と変遷」では、屋号と通名、苗字の関係性について取り上げる。屋号は地域によってさまざまな種類があり、また地域によってもその性格は異なる。そのため、まずは屋号の地域的特徴を明らかにするため、近江の性格の異なる三地域を事例に取り上げ、分類を行なう。分類を行なうことで、主たる屋号を明らかにし、特徴を明確にする。事例として取り上げる地域は、①琵琶湖岸に位置し、農業を主としながら漁業も営まれる同苗字が多いA地区、②異なった苗字の多い山村のB地区、③商店が建ち並びかつて苗字に統一性があつた街道の町、C地区の三地域である。集落内

に同苗字の家が多いため、これを区別するために屋号が成立したと言われてきたことを踏まえて、苗字のあり方が異なっているこれらの地域から、苗字と屋号の関係性について考察を加える。また、近世から近代、そして現代にかけて屋号がどのような歴史的背景のもと成立し、それぞれの時代でどのように使用されたのかを明確にするため、近世文書から検証し、近世における通名との関わりから論じていく。ここでとくに留意すべきは、明治になって出された数々の名前に関する法令であろう。苗字の必称などの法令が現在の名前のある方を作ったことを踏まえて、近世・近代移行期の名前の変革について述べる。そして最後に、三つの集落における屋号の使用法や在り方を把握し、屋号と苗字の関係性を踏まえたうえで、屋号の成立とその変遷をたどる。

第三章「家の名」の生成と継承」では、明治期以降、苗字が使用され始めたにも関わらず新たに生み出された屋号について考察を行なう。第二章でも取り上げたB地区を事例に取り上げ、まずは、世代および男女の違いにおける屋号の使用状況から、屋号の継承方法を明らかにする。B地区では、屋号は若い世代になるにつれて使用されなくなっており、認知度も低いことから、世代によって屋号の使用状況が異なっている。そのため、屋号の継承方法も世代によって異なる。また男女の差異についても触れ、男性の場合は青年組

織との関わりから屋号の継承について論じていく。そして近代において屋号はどのように生み出されたのかについても考察を行なう。これらを踏まえたうえで、近代以降生成された屋号が数多く使用されているA地区を事例に、前章で行なった分類を用いて検討し、近代以降に生み出された屋号の特徴を明らかにしていく。そして近代になっても屋号が生み出され続けた要因を考察する。

第四章「家の名」の名付けと家意識」では、「家の名」が取り入れられた個人名について考察を行なっていく。近代になると「家の名」は、個人名にも大きな影響を及ぼすことになる。「家の名」にちなんだ名付けが行われ、これによって名付けられた名前は「家を示すことのできる個人名」とも言うことができる。つまり「家の名」の名付けが行なわれてきた。「家の名」と個人名は相互に影響を与えてきたにも関わらず、個別に研究が行われ、両者を関連つけた研究は行なわれていない。この「家の名」の名付けは、祖名継承による名付けと結びつく。祖名継承は上野和男によって提唱された名付け方法であり、何らかの関係にある先祖の個人名の一部、もしくは全部を継承して子どもに命名する方法、また、特定の先祖の名をとって子どもに命名することが正常な子どもの社会的地位を示すと考えられる命名法である〔上野一九八二、二四九～二五〇〕。祖名継承の研究は歴史性が欠如していることが指摘されてきた〔吉田一九

八八など」。そこで、近世から現代にいたる時間軸の中で「家の名」の名付けという視点から祖名継承について再検討を行なう。まずは近世における改名を前提とした子どもの名付けのなかで、通名に因む名付けが行なわれていたのか、A地区を事例に通過儀礼のひとつである烏帽子着に伴う記録に記された数世代に渡る家ごとの子どもの名前と宗門人別帳に記された集落全体の子どもの名前から検証する。そして、明治初期に出された国名・旧官名の禁止、改名の禁止という通名の終焉を招いた法令を踏まえ、明治期の史料から「家の名」の名付けを考察する。また、明治から現代にいたるまで、家々で行なわれてきた子どもの名付けから、「家の名」の名付けの意味を問う。そして、近代の家意識と「家の名」についても考察を行なっていく。

¹ 一般的には苗字や屋号を含む家の呼び名を家名と言うが、屋号のみを家名と称する地域もあるため、分析概念としての意味を込めて「家の名」という語を使用する。

² 中野卓一九七八―八一『商家同族団の研究 第二版』(上・下巻)、未来社

³ 有賀喜左衛門一九六七(一九三九)『大家族制度と名子制度――南部二戸郡石神村における』(有賀喜左衛門著作集 三)、未来社

第一章 「家の名」をめぐる研究

第一節 屋号研究とその問題点

屋号は、早川孝太郎や最上孝敬によって、早くから民俗学における研究対象として取り上げられた〔早川一九三一、最上一九三七〕。しかし、各地における事例報告は多数見られるが、屋号の分類を主にしたものが目立ち、分析や考察はあまりなされてこなかったと言える。そのなかでも、一集落やその周辺地域という狭い範囲を事例とした研究ばかりで、さまざまな特徴を持った集落を比較研究されたものはない。そのため、広範囲における屋号の地域的特徴が明らかにされてこなかった。岡野信子が、屋号語彙から東日本は人名屋号、西日本は居住場所屋号を主であるが西日本の沿岸域、島嶼域においては人名屋号も認められるという地域の特徴を指摘した程度である〔岡野一九八二、一九九〇二〇〇〕。しかし、この岡野の研究は、屋号語彙から導き出した地域の特徴であるため、生業や集落の立地条件など、屋号を取り巻くさまざまな背景は視野に入れられていない。これらを踏まえて屋号の持つ地域の特徴を明らかにしていかななくてはならない。

屋号の特徴を明らかにするため、まずは屋号の分類を行なっていく必要がある。屋号の分類を試みた研究の中で、ほとんどの研究者は屋号の由来を元に分類を行なってきた。代表的なものとして、早川孝太郎と最上孝敬の研究が挙げられる。屋号の本格的な研究を始めた早川孝太郎は、三河の北設楽で家名（屋号）調査を行ない、採集した屋号個々の成立過程や由来などを考察し、分類¹を行なっている〔早川一九三一〕。早川が行なった分類は、最も代表的なものとして、『日本民俗大辞典』²の「屋号」の項目にも引用されている。また最上孝敬は、柳田國男が行なった山村生活調査の「家印其他 山印・木印の種類。屋号。」という項目の調査結果をまとめた。そのなかで屋号を由来によって六つに分類³し、成果を紹介した〔最上一九三七〕。このほかに、地理学の山口彌一郎も同様に、由来によって六項目の分類⁴を行なっている〔山口一九三七〕。人類学の梶田純子は日本とスペイン・バスク地方の屋号双方を命名理由と機能から分類し、両者を比較した⁵。〔梶田二〇〇三〕。

以上が屋号の由来により分類しているのに対し、杉村孝夫は、宮崎県や群馬県などの屋号を調査し、屋号の構成要素を人口密度、居住地の歴史、産業との関連から論じたうえで、相対的命名法と絶対命名法からなる三四項目の分類を行なった〔杉村一九七七〕。また岡野信子も、屋号を構成する語彙の分析を通して、命名の視点から四

○項目に分類している〔岡野一九八一〕。杉村、岡野の研究による分類は、語彙から命名の視点に基づいて行なれたことによって細分化してしまい、地域における屋号の特徴が明確にならないことが指摘できる。屋号の地域的特徴を導き出すためには、あまり細分化せず、命名理由や由来、生業や職業、集落の地理的状况などさまざまな要因を加味しながら分類を行なっていくはならない。そこで本章では、屋号の特徴を明確にするため、屋号の由来から分類を行なった先行研究に依拠しつつ、これまで行われてきた分類を参照して、近江の屋号を命名理由や由来などさまざまな要因を加味し、まずは新たに分類を行なっていく。

屋号の成立について、早川孝太郎は「事実村の生活に於ては、所謂二字名を許された者は、数へる程しか無かったのだから、一種の便宜主義から云うても、之が継承され存在したのに不思議」はなく、「起りが古い」と苗字の使用が許されていない近世の村落において「家名」、つまり屋号が家々を区別し、またその成立を古いとした〔早川一九三一、三五〕。桜田勝徳は「苗字のない似たりよったりの何兵衛何右衛門を人名としてゐた頃には、同じ部落内に同名人が至極出来易い状態に在り、その混乱を防ぐ為にも代々の家名が必要であつた」と推測しており〔桜田一九三六、一〕、一方で、山口彌一郎は「根源に於ては村の屋号も、他の名処も正しくは地名であつた」と、屋

号は地名に由来すると述べている〔山口一九四三、九七〕。これに対して定説では、一般的には、集落内に同苗字の家が多いため、これを区別するために成立したと言われている。苗字を持った明治以降の事例から屋号の成立を述べていると言えよう。同苗字の多い集落は、苗字で家々を区別できないため、屋号をもって家々を区別するという働きが特に顕著になる。異なつた苗字の多い集落では、苗字で家々を区別することができると、定説にあるような屋号が成立する根拠がなくなってしまう。つまり、屋号の成立について定説に当てはまらない地域が存在すると言える。このような定説が誕生した理由として、地域ごとの具体的な事例研究が行なわれてこなかったことが大きな要因であろう。

そもそも苗字は、明治三（一八七〇）年に公称が許可され、明治八（一八七五）年に苗字を公称する義務を負つたことによって、今日のように使用されるようになった。現在我々が使用している苗字や名前は近代国家によって規定されたものと言えることから、近代に名前の転換期を迎えたことを加味しなければならない。そのため、近世から現在まで長い時間軸のなかで通名、苗字、屋号、個人名などの名前を捉えていくことが求められる。屋号の成立について、具体的な事例から屋号の地域的特徴を明らかにし、苗字との関係から歴史的な視点も取り入れて検証していく必要があるだろう。

また、定説とは異なり、明治期以降においても屋号が新たに生み出されていた。岡野信子は『屋号語彙の開く世界』のなかで、屋号の命名には、名乗り屋号、共同命名屋号、拝領屋号の三パターンがあり、共同命名屋号には、村人がいつ知らずに呼んで定着した屋号と、村人が集まって決めた屋号があると述べている。また、屋号が命名され、披露されることによって、集落の人々に承認されることが肝要であったという事例も紹介している〔岡野二〇〇五〕。これらは、おそらく近代もしくは現代に命名された屋号についての事例紹介であると考えられるが、明確な時代は明らかではない。近代になって生み出された屋号については、当てはまるかもしれないが、近世から現代にいたる歴史的な考察を行なったとき、岡野の唱える命名の三パターンは当てはまらないと言えるだろう。屋号の使用目的、使用目的、歴史的考察などから、近代以降生み出された屋号についても考察を加えていかななくてはならない。

第二節 「家の名」の名付けと祖名継承法の研究

「家の名」の研究を進めていくうえで、個人名との関係性を無視することはできない。「家の名」は個人名に影響を与え、また個人名

は屋号の生成などで「家の名」に影響を与えてきた。両者は相互に影響を与えあってきたにも関わらず、個別に研究が行われ、両者を関連つけた研究が行なわれていないことが指摘できる。

これまで、地域社会における「家の名」、とりわけ苗字・通名の研究は、主として歴史学分野を中心に行なわれてきた。近年では、坂田聡や大藤修の研究を挙げることができる〔坂田二〇〇六、大藤二〇一二〕。これらの研究では、古代から前近代の苗字、名前の歴史や在り方、また近世における通名の実態などを中心に説明がなされてきた。民俗学においては苗字・通名が注目されることは少なく、体系だった研究が形成されるには至っていない。

その一方で、民俗学は二〇世紀初頭から命名習俗の研究をはじめとして、命名儀礼や祖名継承法など名前の研究がなされ、個人の名前を取り巻く研究の蓄積を行なってきた〔田中二〇一四など〕。地域社会における「家の名」と個人名を取り巻くすべての事柄を含めた研究、そして両者の研究成果を収斂し関連付けた研究は、民俗学でこそ行なうことができると言えよう。

第三章で考察を行なう近代における屋号の生成についても、個人名が大きく影響を与えている。また、出生時の命名によって屋号と同じ個人名を持つ人、屋号に因む個人名を持つ人が少なからずおり、個人名に屋号が取り入れられている。その代表が祖名継承法による

名付けである。

祖名継承法は一九八〇年代上野和男によって提唱された。祖名継承とは、何らかの関係にある先祖の個人名の一部、もしくは全部を継承して子どもに命名する方法であり、また、特定の先祖の名をとって子どもに命名することが正常な子どもの社会的地位を示すと考えられる命名法である〔上野一九八二、二四九～二五〇〕。上野は、祖名継承法が日本人の祖先観を明らかにし、日本の家族構造を明らかにするための指標とした。そして祖名継承法を父、父の父など父方の先祖の名前を継承する「父系型」と父方母方双方の先祖から名前を継承して命名する「双系型」のふたつに分類している。「父系型」は家族の後継者である跡継ぎが父ないし父の父の名前の一部を継承する方法であると説明する。継承する名前の一字はその家族のシンボルであり、家名であると述べ、これを見ればその人がどの家族に所属しているかを確認することができるという。やがて転出する家族員に家族のシンボルを継承させても意味がないことから、跡継ぎ以外の次三男や女性は祖名継承法の対象から除外される。その背景には父方先祖のみが自分たちの先祖であるとする父系単系的な先祖観があると述べている。また、父系型の祖名継承は東北地方から近畿地方にかけて認められるとした。

「双系型」は長崎県五島や奄美・沖縄などを主として西南日本地

域に多くみられるという。双系型の祖名継承の背景には、父方母方双方の先祖、つまり村の集合的な先祖を先祖と認識する柔軟な先祖観念があり、地域の社会組織の差を基盤として地域差が生じるとしている。この祖名継承法は特定の先祖との関連を明確化することによって一定の社会的地位が賦与される命名法であり、頻度に差が認められるものの、日本人の有力な命名法の一つであると指摘している〔上野一九八二、二〇〇六〕。

上野の祖名継承の研究に対して吉田竹也は問題点を三点挙げている。第一に当社会の命名の中から祖名を継承する命名のみを対象としてよいのかという点、第二に一村落の祖名継承法の「構造」が一つの系譜的モデルに置き換えられるか否か、第三に祖名継承法の「構造」が該当社会の社会構造と機能構造的相関性を示すか否かという点である。祖名継承法の「構造」の探求が一村落の命名の本質理解につながるのか、系譜的方法の採用や、社会構造との関連性の指摘はどこまで該当社会の理解に開かれた議論になるのかということに指摘する。そしてこれらを踏まえて、奄美沖永良部島の「ナーチキ⁷」と呼ばれる命名慣行の分析から、先祖から名前をとるということが、社会的価値の付与という生児志向と、そういった価値を持つ祖先を名前の継承によって敬い崇拝するという祖先志向の二つからなっているということを明らかにした。この祖先崇拝は沖永良部

島の社会においては極めて重要な意味を持っており、ナーチキはこうした祖先崇拜のひとつの表れであると結論付けている〔吉田一九八八〕。

また八木透は、上野の研究を綿密な現地調査に基づいて命名の事例を蓄積し、精密な分析を試みながら、単に命名法や名付けの構造分析に止まることなく、日本家族の構造的性質の解明に直結させたという点を高く評価している。しかしながら、問題点も指摘する。それはまず、上野が提示した調査対象であるそれぞれの村落における祖名継承の割合に関する問題である。祖名継承による命名は主たる命名法であるとは言えず、祖名継承による名付けの割合が非常に高い地域と低い地域が存在することの意味とその理由に関しては、上野の論の中では説明がなされていないと指摘している。一村落に限定しての命名法の調査では、祖名継承による事例だけを取り上げてその構造を詳細に分析する前に、まず命名の由来や意識の背景に関する全体的な把握と理解が必要ではないかと述べている。そして他の命名法よりも祖名継承による命名を選択すべき何らかの根拠と社会的背景が存在するのではないかと指摘する。さらに、近世から明治期にかけて個人の名前そのものもつ意味や命名法がいかなる変遷の道を行んだか、その歴史性を問うべきだとした。第二に、祖名継承はそれぞれの社会における祖先祭祀、先祖観と結びついてい

ると言えるのかという点である。以上から、子どもの命名という、きわめて個人的な感情や想いが入り込みやすい行為であるがゆえに、それを抽象化し、家族・親族の構造を類型化するための一指標とする過程で、何か非常に大切なものを見落としてしまうのではないかとする〔八木二〇〇六〕。

一方で森謙二は、明治初期の一人一名主義の原則が確立されたとき、命名の在り方が大きく変化したことを前提に、親の名前を一字継承する方法は、家的伝統が維持される中で襲名に代わる新しい命名法として展開したと述べる。襲名ではない新たな祖名継承の習俗、つまり通字の慣行がここにおいて形成される。しかしこのような命名法が地域の命名法として規範化され、ルールとして定着されたとはとは言えず、襲名と違って地位の継承と結びついていいるとは言えないとした。また、上野の祖名継承の研究に対しても近代以降の事例に限定し、近代に名付けの方法が大きく変化したことを念頭におくべきであると指摘している〔森二〇〇六〕。森は上野が言及しなかった祖名継承の成立とその歴史性について述べてはいるが、現在もなお、祖名継承による名付けが行われている地域もあることから一時的な現象とは言い難く、定着しなかったとは言えない。

また、上野は跡継ぎに対して祖名継承が行なわれているとし、次三男は祖名継承の対象から除外されるとするが、森は近代になって

行なわれた通字の慣行、つまり祖名継承の習俗は襲名と違って地位の継承と結びついているとは言えないと述べ、ここにおいても両者の指摘にはずれがある。祖名継承によって名付けられるのは誰かということを明確にしなくてはならない。

屋号に因む個人名を「家を示すことのできる個人名」と考え、これを「家の名」の名付けと捉えたい。そのうえで、これまでの祖名継承研究における問題点を踏まえ、近世から近代移行期を含む祖名継承の歴史の変遷、地域社会における祖名継承の頻度、なぜ祖名継承による命名を選択したのかを明らかにし、まずは「家の名」の名付けという視点から祖名継承について再検討していく。そのうえで、近代における家意識と「家の名」の関係についても明らかにしていきたい。

第三節 家研究と家意識

家についての研究は、これまで民俗学をはじめ、社会学、人類学、歴史学など数多く研究がなされてきた。家についての定義もいくつかなされてきているが、竹田且は家を「家族によって営まれる生活共同にもとづく文化的・社会的な組織単位」とであると定義づけ、家

族については「夫婦・親子関係を中心とする血縁的で、しかも最小の集団単位」と定義した。家は家族を含む包括概念であり、家族は短命であるのに対して家は永続を願望されるものと述べている〔竹田一九七〇、六〇七〕。

柳田國男は家族を賃金のいらない労働組織として捉え、さらに家はその信仰面から、祖先祭祀が核として存在し、日本人の家永続の願いを表わすとした。これを受けて展開されたのが、有賀・喜多野論争である。その論点は、親族関係のない養子や奉公人という非親族を家の成員とみなすか否かという解釈である。有賀は家の生活機能に関わり、家を生活の内部から支える限りにおいては、血縁、非血縁を問わずすべて家成員として認められるとした。一方、喜多野は歴史的な家族形態である家は、その核に普遍的な小家族結合を含んでおり、家族固有の構造を離れて家は理解できないとしている。有賀は機能的側面から、喜多野は構造的側面から家を規定しようとした〔中込一九九七、六二一―六五〕。戦前の家研究はこのような家の概念規定とその構造の解明をめぐって展開するが、戦後は家族・親族の構造分析が主流となり、大間知篤三や蒲生正男、上野和男などによって類型論的家族・親族研究が行なわれていく。しかし一九九〇年代には構造分析に基づく類型論は批判を受けて衰退する。近年では、現代的な事柄や伝統的事象の変化を取り上げた研究が見られ

るものの、家研究は低迷していると言わざるを得ない。

清水昭俊は、家は仏および生きた成員によって担われているが、その成員の次元とは別個の次元に位置する自立した存在としての認識像があり、それを象徴的家と称した。そして家の内面的構造は、象徴的家、仏体系、地位構成などの諸次元にわたる諸要素の複合体として文化的に構成されていると述べている〔清水一九八七、二〇六―二一七〕。また家研究の課題として、「家は多元的な存在であって、それゆえ家族や世帯や家業経営体などとしてではなく、家を家と理解する限りは、分析よりもむしろ総合を主たる方法とするべきであろう。家を包む込む外的・公的領域——同族団、親類、村落共同体、政治的・経済的体制、法等——からの規制、この規制に相對する「制度体」〔中野 1987-81:107〕。としての象徴的要素——家の意識、屋号、姓、家紋、祖先祭祀等々——、家の政治的、経済的、社会的機能、そしてこのような家を担う成員の構成と動態、これら家という事象に含まれる諸要素間の相互関連は、記述的な事例研究では全体にわたって取り上げられていた〔中野 1978-81、有賀 1967a〕。ものの、理論的には限られた要素間の分析的な考察に限られていて、家に関与するイデオロギイ的、政治的、経済的、社会的、そして物的な諸要素間の相互関連が、全体にわたって理論化されるには至っていないように思われる。このような諸要素間の相互関連

の全体を家の文化的構成と称するならば、この文化的構成が今後の家研究の主要な課題であろう」と述べている〔清水一九八七、一五一〕。清水が家研究の課題として挙げた家の文化的構成の中でも象徴的要素として取り挙げられる家意識について、検討する必要がある。同じく象徴的要素として挙げられている屋号、そしてとくに挙げられてはいないが、屋号に因んだ個人の名付けから検討していく。

家意識に関する研究は、主に歴史学、社会学の研究を挙げることができる。近世期における家意識について、遺言書から家意識を論じた後藤重巳や〔後藤一九九一〕、家意識の確立と農村社会の成立から論じた内田鉄平〔内田二〇〇三〕、小農層における家意識の成立を論じた加納亜由子などが挙げられるが〔加納二〇〇三〕、近世における家意識を説いたもののなかで、代表的なものは大藤修の研究である。大藤は家を固有の「家名」「家産」「家業」をもち、先祖代々への崇拜の念とその祭祀を精神的支えとして、世代を超えて永続していくことを志向する組織体と定義づけ、近世農民層における家意識の一般的成立を明らかにしている〔大藤一九九六〕。

近代以降の家意識の研究は社会学を中心に進められ、家族研究のひとつとして蓄積されてきた。そのほとんどがさまざまな指標を設定し、質問項目から家意識を採るものとなっている。

家意識の定義について、森岡清美は、家意識とは「積極的には家

の規範を支持し、消極的にはこれになじみやすい意識」とした〔森岡一九八〇、一二四〕。しかし、坂本佳鶴恵は家意識という概念はそれ自体非常に曖昧であり、明確な定義が共有されていないまま、異なる多様な意識を一括して論じようとしたため、家意識に関して矛盾した説明や論拠が出されていたと指摘している。そこで家意識とは、「血縁集団において、長男およびそれに準ずる男子を戸主とする一元的な戸主権・親権・夫権を認め、集団の維持と諸権利の継承の観念を有する規範意識」と定義づけた〔坂本一九九〇、七六〕。

野口道彦は「家意識と結婚忌避」のなかで「家意識とは、伝統的な家族を成立させる規範をどの程度内面化しているのかを個人の意識のレベルで捉えたものである。先祖から連綿と続く家を継承することに重要な価値を置いたり、個人よりも集団としての家を重視する意識であり、旧来の伝統的な秩序を基盤として生まれている」と定義づけ、家意識を一元的なものではなく、いくつかの次元から構成されるものとして、家柄、家名、祖先祭祀、長男単独相続、長男の同居・扶養責任、家本位の結婚、養子相続、財産処分、祖父母扶養、夫の姓という一〇項目によって家意識を抽出した。そこから、家意識は、連続性因子と直系制因子との二つの大きな構成要素からなると結論付けている〔野口一九九三〕。また、木下栄二は家意識に焦点をあてた研究は、戦後の民法改正による「家制度」の廃止をう

けて、家族意識研究といえば家意識の研究といっても過言ではないほど、その展開の中心をなしてきたとし、家族意識とは石原邦雄が規定した「家族という社会関係について個人および人々がもつ、価値づけと規範および家族行動に対する態度」〔石原一九八二、二二〇〕としている。そして家意識を扱う家族意識研究の問題点として、①家をどのように概念化するかという概念構成に関わる問題、②家意識をいかに測定するかという問題のふたつを指摘する。家意識から家族像を捉えることを目的にさまざまな質問項目から家意識の測定を行なってきた研究を踏まえ、設問群から家意識は測定できるのか、また設問群が測定してきた家意識、もしくは家とは何かという問題設定や概念構成の再検討する必要性を説いている〔木下一九九五〕。

以上のように、家意識を定義づけしようとした研究も見られるが、家意識は実体のない概念であるために抽象的なもの、曖昧なものと言わざると得ない。木下も指摘するように、家に関するさまざまな質問項目から家意識を探ることに主題を置いてきたこれまでの研究では、家意識を具体的な行為ではなく、抽象的なものとして捉えてきたと言える。そして、家意識をいかに抽出するのかという問題に対しても明確な答えは出されていない。しかし、家意識を持つ主体は誰であるのか、それは誰に対するものであるのか、また家意識は何に、もしくは誰にどのように作用するのかということを問うこと

により、家意識が働く方向が明らかとなり、家意識の抽出もまた可能となるのではないだろうか。清水が述べたように象徴的家を構成する家意識ではあるが、その象徴の要素として、具体的には屋号やそれに因む名付けを挙げることができる。また屋号は、家の成員が抱える自家に対する家意識を対外的に表出していると推測されることから、実体のない家意識が具体的に表出されるものとして屋号を捉えていく必要がある。そして近世から現代という長い時間軸のもと歴史性を踏まえて「家の名」について論じていく。

- 1 ①新開を意味するもの、②本據又は本家を意味するもの、③位置又は方位を言ふもの、④地名地名又は地相に據るもの、⑤職業より言ふもの、⑥建築様式又は建築より言ふと思はるゝもの、⑦家印又は家紋を言ふもの、⑧村に於ける格式又は職分を言ふもの、⑨出身地を言ふもの、⑩家の祭神より言ふと思はれるもの、⑪村に於ける行事の印象より言ふと思はれるもの、⑫由来不明のもの

2 福田アジオ他編二〇〇〇『日本民俗大辞典』下巻、吉川弘文館、

七一九〜七二〇頁

- 3 ①地勢に関するもの、②家居その他建造物の存在に関するもの、③家の新旧本別に関するもの、④役柄職業にかゝるもの、⑤古き先祖の名をとったもの、⑥その他
- 4 ①氏名に依るもの、②上中下の位置を示すもの、③道路に関するもの、④飲料水に関するもの、⑤川端、海岸の位置を示すもの、⑥その他

- 5 【機能的分類】①同姓が多い集落で、家と家を区別する、②地理的位置を示す、③集落での方角・地理的位置を示す、④家と家の位置関係を示す、⑤住所のかわりに家の位置を示す、⑥「家」の新旧を表す、⑦生業を表わす、⑧集落（グループ）での地位・役職を表わす、⑨ある家から分かれて建てられた家を表わす、⑩家の材質を表わす、⑪そこに住んでいた人（先祖）を表わす、⑫集落のメンバーであることを意味する（特に渾名の屋号）、⑬小地名や小字、その家のある場所にある木・田などを表わす、⑭親しさ、親しみを自然と表わす、⑮集落での家格を表わす、⑯本家・分家関係を表わす、【機能別伝承例】①地理的位置を表わす、②ムラでの家格を表わす、③本家を表わす、④分家を表わす、⑤家の古さを表わす、⑥生業を表わす、⑦渾名の屋号、⑧人名型屋号

⁶ 『日本民俗辞典』や『日本社会民俗辞典』にもこの説が取り上げられている〔大塚民俗学会編一九七二『日本民俗事典』弘文堂、日本民族学協会編一九五二『日本社会民俗辞典』第一巻 誠文堂新光社〕。

⁷ ナーチキとは、生児がいずれかの関係にある親族から名前の一部ないし全部を貰い受けることであるという。名前には、公的な「ガツコーナ」と私的な「シマナ」があり、ガツコーナのナーチキは一字あるいは一音を取るなど多彩な継承法がある。一方でシマナは特定の祖先からシマナを受け継いで命名されていたが、シマナそのものが消滅しつつあるという。

⁸ 中野卓一九七八―八一『商家同族団の研究 第二版』(上・下巻)、未来社

⁹ 有賀喜左衛門一九六七(一九三九)『大家族制度と名子制度――南部二戸郡石神村における』(有賀喜左衛門著作集 三)、未来社

第二章 「家の名」の成立と変遷

はじめに

本章では、近世から近代、そして現代にかけて「家の名」がどのような歴史的背景のもと成立し、それぞれの時代でどのように使用されたのか、屋号や苗字の共通性や相違を踏まえながら明らかにしていく。

屋号は地域によってさまざまな種類があり、また異なった性格を有しているため、まずは、屋号の地域的特徴を明らかにしていく。そのために近江の異なった性格を持つ三地域を取り上げ、まずは屋号の分類を行なっていきたい。これらの地域はいずれも屋号があり、苗字の有り様が異なっていることから、苗字と屋号の関係を明らかにすることが出来ると考え、選定した。また農村、山村、町と集落の性格が異なっていることも選定理由の一つである。それは、琵琶湖岸に位置し、農業を主としながら漁業も営まれる同苗字が多いA地区、異なった苗字の多い山村のB地区、商店が建ち並びかつて苗字に統一性があった街道の町、C地区の三地域である。

続いて屋号の成立を近世文書から検証し、近世における通名との

関わりから論じていく。また、明治政府の名前に関するさまざまな政策が、現在の名前の在り方を作り、屋号にも影響を及ぼしたことを踏まえ、近代移行期における名前の変革について述べる。最後に、三つの地域における屋号の使用法や在り方を把握したうえで、屋号と苗字の関係性、屋号の成立とその変遷をたどっていく。

第一節 近江における屋号の地域的特徴

まず、これまでの研究で行なわれてきた分類を参照し、先述した調査地の屋号を分類していきたい。

事例一 同苗字が多い農村——A地区

A地区は琵琶湖岸にあり、ふたつの川の河口に位置する集落である。多くは稲作を主とした農業を営む兼業農家であるが、エリ漁や築漁などの漁業も行なわれている。人口は、平成二三（二〇一一）年三月には四三二人一四〇世帯となっている。そのなかで村入りをしている家は一二軒あり、享保九（一七二四）年に九六軒、明治一三（一八八〇）年一二一軒であるため、旧村の戸数自体は前近代からあまり変動はない。

表2-1 A地区の屋号

番号	屋号	分類	番号	屋号	分類
1	ハンベエ	祖名	57	ナオジロウ	祖名
2	ゲンベエ	祖名	58	タザエモン	祖名
3	トウダユウ	祖名	59	ヘイジロウ	祖名
4	モヘイ	祖名	60	ヒコベエ	祖名
5	ヒチロヘエ	祖名	61	キチベエ	祖名
6	ゲンダユウ	祖名	62	イチサブロウ	祖名
7	ベンゾウ	祖名	63	トクザ	祖名
8	サブロダユウ	祖名	64	ゲンヨ	祖名
9	リエモン	祖名	65	ジンエモン	祖名
10	イチヨ	祖名	66	カンジロウ	祖名
11	スケエモン	祖名	67	ウヘエ	祖名
12	セイベエ	祖名	68	マタベエ	祖名
13	タラダイ	祖名	69	シンヨモン	祖名
14	クヘエ	祖名	70	ススム	祖名
15	ショウザ	祖名	71	タゾウ	祖名
16	シンザエモン	祖名	72	サンシロウ	祖名
17	タロベエ	祖名	73	ヒョウゴロウ	祖名
18	ジロサン	祖名	74	ソウダ	祖名
19	クヨモン	祖名	75	マゴエモン	祖名
20	タラスケ	祖名	76	タダスケ	祖名
21	マタスケ	祖名	77	キチザエモン	祖名
22	ナカミ	祖名	78	イチロヨモン	祖名
23	ハンベエ	祖名	79	イチザエモン	祖名
24	カワジ	祖名	80	タヘエ	祖名
25	キンジ	祖名	81	ヒチロウザエモン	祖名
26	キンチャン	祖名	82	ジンバイ	祖名
27	ヤジベエ	祖名	83	オトジロウ	祖名
28	オハマサン	祖名	84	シンスケ	祖名
29	キヘイ	祖名	85	ゴンベエ	祖名
30	キダユウ	祖名	86	ヤエモン	祖名
31	ヤサゾウ	祖名	87	オケヤ	職業
32	リザエモン	祖名	88	コウヤ	職業
33	マキタケ	祖名	89	ニンギョウヤ	職業
34	センノヒチ	祖名	90	ザイモクヤ	職業
35	カメジロウ	祖名	91	カワラヤ	職業
36	ヒチザエモン	祖名	92	カワラヤ	職業
37	ニダユウ	祖名	93	ゲタヤ	職業
38	ロクザエモン	祖名	94	カシマサ	職業
39	ジヘエ	祖名	95	カジヤ	職業
40	ウノスケ	祖名	96	カシヘエ	職業
41	キュウヨモン	祖名	97	キンロク	商売
42	ジンザ	祖名	98	オウミヤ	商売
43	ミズイチ	祖名	99	フルタ	商売
44	ミズロク	祖名	100	キタタツ	商売
45	サジ	祖名	101	ヤマキュウ	商売
46	ナカトラ	祖名	102	マスチョウ	商売
47	キチジ	祖名	103	ナカセン	商売
48	ヤハチ	祖名	104	イシバ	地名
49	キンササン	祖名	105	カタタ	地名
50	ヤシロ	祖名	106	タンバ	地名
51	タキサン	祖名	107	クヨモンマサ	系譜
52	ハンヨモン	祖名	108	ゲンダイガメ	系譜
53	スエハル	祖名	109	ソウジ	系譜
54	リハチ	祖名	110	ハンベエトヨ	系譜
55	ゴンザエモン	祖名	111	イマニシ	苗字
56	ヘエベエ	祖名			

村入りをしている家の一二軒のうち屋号を有する家は九五軒と
なっている。これら九五軒の屋号と転出してしまった家や絶えてし
まった家の屋号を合わせて、一一一の屋号を知ることができた。表
2-1がA地区の屋号一覧である。

屋号は日常的に使用され、生活のいたるところで垣間見ることが
できる。世代が若くなるにつれて全戸の屋号を知る人はいなくなる
が、現在も屋号は広く使用されている。A地区では苗字をほとんど

使用せずに、屋号を使用して家を特定しており、主に会話の中で使
用され、家を特定する名前である。屋号と同じ「家の名」である苗
字では、同苗字の家が多いため家を特定することができない。その
ため苗字とは異なる呼称として屋号を使用している。しかし、屋号
の持つ働きは苗字では特定できない家を示すだけではない。苗字の
使用は他人行儀であるのに対し、屋号を使用することは、信頼感や
親近感があると言う。

さらに屋号の働きは家の特定だけではなく、身近なものとして、通称地名や橋の名称、遊び歌などに転用されている。集落内の場所を指し示すときに、小字のなかでもさらに特定した場所を指す地名として、屋号を用いた通称地名が使用される。家が転出・移動した際にその家のあった場所は、タザエモンヤシキ、ゲンヨヤシキと呼ばれる。この屋号を転用した通称地名を持つ場所へ新たに家が転入してきた場合において、通称地名となった屋号を引き続き使用するということはない。そのため、屋号を転用した地名を持つ土地へ新たな住民が転入した際には、通称地名は失われてしまう。しかし、田畑などの場合は、屋号を転用した通称地名を残すことが多い。屋号が地名として残され、使用されることから、その屋号を有していた家を知らなくとも、そのような家があったということを窺い知ることができる。また、集落内の主要な道に架けられた橋には、ゲンスケ橋やキューサク橋とその橋があるすぐ近くの家の屋号が使用されている。通称地名、橋名には地形的特徴や象徴的な建造物などではなく、屋号が用いられていることから、A地区において屋号がいかに生活に浸透したものか窺い知ることができる。

また、屋号は家に付くものであるため、村外へ転出する際には、屋号は失われることになり、村内で移動する折には屋号を伴って移動をする。そして、屋号は新たに分家した家や転入してきた家には

なく、数世代に渡ってA地区に暮らす家にはあるという。つまり、分家した家でも、長くA地区に居住している家には屋号がある。屋号は永久的なものであり、変更されることはほとんどない。その有効範囲はA地区の集落のみで、他所では通じず、さらに書き示すものではない。

表2・1に一覧したA地区の屋号を先行研究に依拠しつつ、命名理由や由来、生業や職業を加味し、細分化せず特徴が明確になるように分類を行なった。全ての屋号を分析し、①祖名屋号¹、②職業屋号、③系譜屋号、④商売屋号、⑤地名屋号、⑥苗字屋号の六つに分類した。以下、分類に沿って紹介していく。

先祖の名前を使用したと考えられる祖名屋号は、ハンベエ、クヨモン、セイベエ、カンジ、キンササン、オハマサンなど八六あり、全体の約八割を占めている。これらは、A地区の屋号を考える上で最も重要であり、主たる屋号であるといえる。

なかでも、キンササンは、キンサブロウの略称であり、語尾に「さん」という敬称がつけられている。また、明治生まれのおハマさんという女性の名前が屋号となったオハマサンは、A地区の祖名屋号の中で唯一女性名が屋号となった事例である。ナカトラは、苗字の頭文字を一字、名前の頭文字を一字取って組み合わせ命名された屋号である。以上のようにひとくちに祖名屋号といえども、いくつ

かの種類が見受けられる。しかし、なかでも最も多いのはスケエモンやクヨモンといった先祖代々襲名されてきたとされる名前である。この祖名屋号は、名付けにも用いられている。かつて「長男には屋号に因んだ命名をすれば家が繁栄し、命名しなければ家が繁栄しない」とまで言われていた。そのため屋号から一字取る、屋号の名前をそのまま命名するといった屋号に因んだ名前を持つ人は現在も多い。また、家の繁栄だけではなく、このような命名を行なうことによつて、その人物がどこの家の子でもあるかを知る働きも有していた。この屋号に因んだ名付けについては第四章で取り上げる。

職業屋号は、従事していた、もしくは従事している職業に依拠した屋号である。カシヘエやカジヤなど一〇の職業屋号がある。カシヘエは、クヨモンの分家であり、先々代が菓子屋を営んでいた。カシヘエの「カシ」は菓子指し、「ヘエ」は菓子屋を営んでいた店主の名前の頭文字である。このほか、現在も瓦製造業を営んでいるカラヤヤ、ゲタヤ、カジヤ、ニンギョウヤ、オケヤなどかつてのA地区の職業を窺い知ることのできる屋号がある。

系譜屋号は本家・分家関係を示す屋号をいう。ゲンダイガメやソウジなど四の屋号がある。系譜屋号は総じて分家した家を指しており、本家の屋号を一部使用して命名された屋号を持つ。

商売屋号とは、商売をしていたときの店名や商号が屋号となった

ものを指す。マスチヨウやオウミヤなど七の屋号が商売屋号である。ナカセンのように、店主の苗字と名前の頭文字を組み合わせた店名を持つ商店が多い。これはある意味では祖名屋号と言うこともできる。

地名屋号は小字名などの地名を使用した屋号である。タンバ、カタタ、イシバの三例がある。いずれもA地区に来る前に居住していた地域の地名である。

苗字屋号はその名の通り、苗字が屋号となったものを指し、イマニシの一軒のみである。A地区にはイマニシという苗字の家はほかにあるが、屋号と苗字が同一なのは一軒だけであり、またイマニシ苗字の家は親戚関係にある。この家は明治の初めに苗字をイマニシと改名しており、そのために苗字が屋号となったと考えられるが稀有な事例であると言えよう。

事例二 異苗字が多い山村——B地区

B地区は、隣県との県境にある山間の村である。人口は六八軒一七九人（平成二三年四月）となっており、昭和四五（一九七〇）年の人口三七五人からみると四八％減少し、過疎化が進んでいる。また、高齢化と少子化も進み、一人暮らしの高齢者も多い。若者が進学や就職、結婚などで村を離れたことが高齢化と過疎化に繋がった

表2-2 B地区の屋号

	屋号	分類
1	ゲンゾウ	祖名
2	サヘイ	祖名
3	マタザエモン(マタザ)	祖名
4	チョウベイ	祖名
5	ハンベイ	祖名
6	イザヤ	祖名
7	ハチザエモン	祖名
8	ヒョウヨモン	祖名
9	キュウスケ	祖名
10	サクベイ	祖名
11	ヒコザ	祖名
12	シンスケ	祖名
13	タヘイ	祖名
14	キダ(キダエモン)	祖名
15	ジヨモン	祖名
16	ヨジサン(ヨジロウサン)	祖名
17	ジンキ	祖名
18	ゴロベエ	祖名
19	イゾウサン	祖名
20	ヨザ	祖名
21	ジュウザエモン	祖名
22	ブザ	祖名
23	シンヨモン	祖名
24	ブヘイ	祖名
25	クヘイ	祖名
26	ジロヨモン	祖名
27	キヨモン	祖名
28	ゴロサク	祖名
29	ショータ	祖名
30	タヨモン	祖名
31	ウヨモン	祖名
32	ギヘ	祖名
33	ツネヨモン	祖名
34	カンベ	祖名
35	チョウサン	祖名
36	ニヨモン	祖名
37	サザエモン	祖名
38	ロクロベエ	祖名
39	トクベエ	祖名
40	シンキョ (ヘーザエモン、ヘーダ)	系譜・祖名
41	タタミヤサン	職業
42	カメショ	商売
43	ツチダ	商売
44	アサヒヤ	商売
45	インキョ	系譜
46	フキアゲ	地名
47	チョウド	
48	モリゼン	

と考えられる。かつて炭焼きと材木業が主な生業であったが、昭和五〇年代には衰退し、現在では行なわれていない。

B地区では前述したA地区の事例とは異なり、全六八軒のうち二八種の苗字が存在し、同一の苗字は多くても一〇軒程度である。それにも関わらず屋号は日常的に使用されている。

当地域の屋号の特徴を概観していこう。六八軒の内、屋号のある家は三五軒である。B地区では、分家や他地域から転入してきた家は原則として屋号を持たない。屋号は家に付くものであるため、家が村内から転出したり、絶えたりするとその時点で屋号は消滅する

ことになる。そのため、屋敷はあるが誰も住んでいない家や、家屋は取り壊されて、土地のみを所有する家など、かつて使用されていた一三の屋号を確認することができた。したがって、合計四八の屋号を確認できたことになる。ただし、「シンキョ」「ヘーダ」という二つの屋号を持つ家があるため、実際には屋号の総計は四九となる。これらは表2・2に一覧した。

現在、屋号は主に会話の中でのみ使用され、書き記されることはない。屋号を使用しているのは五〇代より年配の人がほとんどで、一〇代、二〇代の人になると、全く知らないという人までいる。四

○代くらいの人までは、自分の家と近所の屋号くらいは知っているようである。屋号を使用する機会や覚える機会が少ないまま、高校や大学進学とともにB地区を離れる人が多いことが原因と考えられる。

すべての屋号を整理、分析したところ、B地区の屋号は、①祖名屋号、②商売屋号、③職業屋号、④地名屋号、⑤系譜屋号の五つに分類することができた。

祖名屋号は、ゲンゾウ、マタザエモン、イゾウサン、ジュウザエモンなど四〇軒あり、B地区にある屋号の八割を占める。この祖名屋号の由来は昔の人の名前であると多くの人が認識しており、祖名屋号を持つ家の人に、「屋号の名称は何代前の人の名前であるか知っているか」と質問したところ、現代の世帯主からさかのぼって、二〜六代前の当主の名前であるという回答が得られた。また現在も屋号と同じ名前を持つ人物がおり、屋号に因んだ名付けが行なわれている。

本来、B地区の屋号はこの祖名屋号のみだと言われている。なかでも、「ゝザエモン」「ゝモン」「ゝヘエ」とつく屋号は村の中でも特に古い家と言う。そのため、キダや、ヨジサンのように近代以降に誕生したとわかっている祖名屋号を除いたジュウザエモンやハチザエモン、ニヨモン、ハンベエ、ゴロベエ、ブヘイ、イザヤ、ジンキ

など三七が本来の屋号ということになる。つまり、祖名屋号の中でも、近代以降に誕生した祖名屋号とそれ以外の祖名屋号というふたつに分けることができる。

商売屋号は、カメシヨ、アサヒヤの二軒、職業屋号は、タタミヤサンのみである。

地名屋号は、フキアゲの一軒で、以前、吹上に住んでいたことから「フキアゲ」と呼ばれるようになった。吹上とは小字名であり、延享四（一七四七）年の絵図にも「吹上」という小字名を確認することができ。

系譜屋号は、本家・分家関係を示している屋号を指す。B地区では、本家をオモヤ、分家をシンヤといい、原則としてシンヤに屋号は付かないとされている。しかしながら、屋号のあるシンヤがあり、屋号はインキョという。インキョはハチザエモンのシンヤにあたるが、分家した時期は不明である。

このほか、シンキョ・ヘーダという二つの屋号を持つ家もある。シンキョは分家を表しており、系譜屋号に分類できる。この家はすでに転出してB地区にはないが実際には、ヘーダという屋号が使用されていたようである。ヘーダは正しくはヘイザエモンと言い、祖名屋号にあたる。

事例三 かつては同苗字の街道の町——C地区

C地区は、集落の内には旧中山道が走る。近世以降、近江商人が多く活躍したことから、中山道沿いに多くの商店が立ち並び、集落内で揃わないものはなかったというが、現在では当時の面影はほとんどなくなってしまうている。人口は昭和三五（一九六〇）年に四一〇人であったのが次第に増加し、平成一九（二〇〇七）年三月では二七六戸七九八人となっている。昭和五三（一九八三）年ごろから外国人の居住がみられるようになり、平成一九年には四六戸九二人の外国籍の人々が暮らしている。現在の住民の半数は戦後になって入ってきた人々で、転出入も多いことから人口が流動的な集落といえる。また、C地区の旧村では同じ苗字を有する家が多かったというが、人口の増加した現在では苗字に統一性はない。

C地区において、屋号は人口が流動的になる以前、主に戦前期に使用されていた。しかし、現在では屋号を使用している人はほとんどおらず、また屋号を記憶している人も少ない。これは戦後に当地域の転出入が多く、戦前からC地区の旧村に居住していた家が、現在では半数もなく、加えて集落内での移動も多かったことが要因として考えられる。屋号を記憶している人、屋号を使用していたときから居住している人が非常に少なかったため、事例一、二で実施した屋号の全戸調査を行なうことができなかった。しかし、先の事例

とは違い街道沿いに位置した町であること、またかつては同苗字が多かったこと、現在では使用されていなくとも聞き取りによって屋号を採取可能なことなどの理由から、当地域を取り上げた。さらに事例一、二と異なる点として、商家が多く、中山道沿いに商店が立ち並んでいたことから、店名や商号が「家の名」として呼ばれ、さらに、家印までもが「家の名」として使用されていたことが挙げられる。このような店名や商号、そして家印も「家の名」であることから、屋号として考え、外国籍の家を除いた二三〇戸のうち二四の屋号を知り得ることができた。これは現在の戸数から考えると少ないが、明治一三（一八八一）年の九一戸三六一人、昭和三五（一九六〇）年の四一〇人という人口から旧村が約一〇〇戸であったと考えたとき、およそ四分の一の屋号となる。先祖の名前を使用した祖名屋号のみ分家した家には付かないが、それ以外の屋号は分家した家にも付けられていたようである。また、屋号は家に付くものであるため、家が村内から転出したり、絶えたりするとその時点で屋号は消滅したという。

これらの屋号を分析した結果、①祖名屋号、②商売屋号、③家印屋号の三つに分類することができた（表2・3）。表には、屋号のほか家印や、かつて行なっていた商売などを記載している。

祖名屋号は、カワヒコ、スダトク、シロスケ、ジンゴロウ、シロ

表2-3 C地区の屋号

屋号		分類
1	カワヒコ	祖名
2	スダトク	祖名
3	シロスケ	祖名
4	ジンゴロウ	祖名
5	シロベエ	祖名
6	ゴロベエ	祖名
7	タサブロウ	祖名
8	トヨモン	祖名
9	トウベイ	祖名
10	ヤスベエ	祖名
11	ジンザブロウ(ジンザサン)	祖名
12	キチベエ	祖名
13	マンキュウ	商売
14	カドツネ	商売
15	オウミヤ	商売
16	ウスキュウ	商売
17	マルショウ	商売
18	コマセイ	商売
19	シバセイ	商売
20	ランプヤ	商売
21	マルゴ	家印
22	ヤマク	家印
23	ハイヤス	
24	キヤキン	

ベエ、ゴロベエなど一二がある。この祖名屋号はさらに二つに分けることができる。ひとつは先祖代々襲名してきた名前を屋号としているもの、もう一方は、カワヒコ、スダトクのように苗字と名前の頭文字を一文字ずつ取ったものである。

商売屋号は、マンキュウ、カドツネ、オウミヤなどの八軒がある。店名や商号を使用したものや、商売内容と名前が組み合わされたものがある。

最後に家印屋号である。これは家印が屋号になったものを言い、マルゴ、ヤマクの二軒である。

表2・3からも読み取れるように、C地区の屋号の半数は祖名屋

号であることがわかる。商売屋号、家印屋号であっても祖名が一文字加えられている屋号がおよそ半数あり、知り得ることのできたほとんどの屋号が祖名屋号と考えることもできよう。

以上の三地域の事例から、近江の各地域には先祖の名前を使用したと考えられる祖名屋号、商売をしていたときの店名や商号が屋号となった商売屋号、従事していた職業に依拠した職業屋号、小字名などの地名を使用した地名屋号、本家・分家関係を示す系譜屋号、家印が屋号となった家印屋号、苗字が屋号となった苗字屋号の七つがあることがわかった。さらに、分類を行なったことによって、A地区、B地区、C地区ともに祖名屋号が主たる屋号であることが明らかとなった。

また、それぞれの地域に共通する屋号の特徴として、屋号がいずれも土地ではなく家の系譜につくという点である。家が転出、または断絶すると屋号は失われ、村内での移動の際には屋号を持って動き、家督相続と同様にその家に受け継がれていく。これらのことから、近江における屋号の地域的特徴として、屋号は家の系譜につき、祖名屋号が主たる屋号であると言える。

第二節 通名と祖名屋号の成立

同苗字の家が多いために屋号が成立したという定説通りにいけば、苗字のなかった近世には、屋号は成立していなかったことになる。しかし、山口彌一郎や荻沢明雄は、苗字の公称が許可されなかった近世から屋号は存在し、使用されていたことを指摘している〔山口一九三七、荻沢一九七四〕。そうだとすれば、それぞれの調査地においても、近世から屋号が用いられてきたはずである。現在では、屋号を書き記すことはないが、先祖の名前を使用した祖名屋号ならば、その元となった名前が史料上に登場すると仮定される。これらの屋号がいつから使用されていたのか、近世・近代史料に記された戸主の名前から、現在の祖名屋号に当たると考えられる事例を検証することによって、屋号の変遷を考察していく。

まず、前節で概観したA地区において考えてみたい。当時の全戸の戸主名が記載されていると考えられる成人儀礼に関する史料および戸籍簿を用いた。元文四年から大正四年まで、およそ三〇年おきの史料を検証した結果、祖名屋号八六のうち古文書に見ることのできた名前は、五七であった。しかし、検証した史料以外のA地区の古文書すべてに目を通したわけではないため、別の史料の中に屋号と同じ名前が書かれている可能性があると断っておく。こ

れらの名前は、幾世代にも渡って記されており、ハンベエやロクザエモンはすべての史料に名前を見ることができた。

続いて、事例二で概観したB地区である。使用した史料は、戸主名の入る延享四年の絵図と明治・大正期の戸籍簿である。絵図に見られる名前と、現在も使用され、本来の屋号と言われる三七の祖名屋号内、共通している名前は七であった。近世、近代史料に見られた名前は、全部で二二となる。

この事例を元に、B地区にある一〇までの数字にことよせて、屋号を列挙した数え歌のような唱え言について検証していく。「屋号の唱え言」とは、以下のようなものである。

いちはいざや、にいはニヨモン、さんはサザエモン、しいはシンキョ、ごおはゴロベエ、ろくはロクロベエ、しちはヒコザ、はちはハチザエモン、くうはクヘイ、じゅうはジュウザエモン

これは、B地区の年配の方であれば誰でも知っているが、残念ながら、この一〇の屋号を持つ家の半数はすでない。この一〇軒の家は村の中でも古い家であるとされており、すべての屋号に「ザエモン」「〜モン」「〜ヘエ」と付いていることからわかる。「屋号の唱え言」に出てくる屋号の名を持つ家は、延享、明治・大正と

もに約半数ほど含まれていた。

このB地区にある「屋号の唱え言」と同様の事例を山口幸洋が報告している。「ヒコナ唄」と呼ばれる歌で、静岡県浜名郡新居町に残っている屋号（ヒコナ）を軒の順につづったものである。この「ヒコナ唄」は、屋号を覚えるために作られた歌と言える（山口一九五八）。一方、B地区にある「屋号の唱え言」は、一〇軒の家が古い家を示すと言われていることから、屋号を覚えるために作られたとは考えにくい。史料に登場する名前から考えても、古い家を表すというのは間違いない。

以上のことから、祖名屋号に用いられている名前が、近世期に使用されていたことがわかった。また、A地区の事例において、幾世代にも渡って屋号と同じ名前が見られるということから、祖名屋号の名前は近世における通名であるということが言えよう。通名は、苗字を持たない庶民において家の系譜を表わし、家督相続の際に受け継がれていく名前で、代々襲名する名前のことをいう。

明治一〇（一八七七）年に、民法編纂のための材料とすべく、全国の間慣行を調べた報告書である『全国民事慣例類集』の「家督相続の事」の序章には、

第二章 家産相続ノ事

凡ソ家督相続スルトキハ必ス公儀名ヲ唱ヘ其家ノ通名ニ改ル

ヲ以テ高帳名寄帳ノ名ヲ書改ルコトナク宗門人別帳ノ年齢及ヒ隠居セシ父ノ名ヲ書改ルコトニテ実印モ父祖伝来ノ品ヲ用ルヲ榮耀トスルコト一般ノ通例ナシ（後略）

と記されており、家督相続の際には通名に改めることが記されている。この襲名される「其家ノ通名」こそが、祖名屋号の名前にあたると言えよう。近世において、苗字の使用が許されていなかった庶民にとっては、この通名が苗字にあたるものであった。通名は通称とも言われており、井戸田博史によれば、「土地によつて違いはあったが、一般にいつて、庶民にあつても、元服し名を改めて、一人前とされたのである。ただ、庶民では、通例武士などのように実名は持つておらず、権兵衛・文右衛門や太郎左衛門などの通称を名の」り、「苗字を許されていなかった庶民にとっては、この通称が苗字にも、実名にも比肩されるものであった」と説明する（井戸田一九八六、九二）。つまり苗字の使用が許されなかった人々にとって、通名は苗字の役割を果たすことで家を持定する働きを有し、また家を表すシンボルであった³。早川孝太郎が、屋号は「或意味に於ける苗字でもあった」と述べていることから（早川一九三一、三五）、苗字の使用がない近世に、苗字の代わりを果たしていたこの通名こそが、祖名屋号の起源といえるだろう。

坂田聡は、苗字と継承される通名の成立・普及について論じてお

り、その中で、通名は「家を代表する家長の名であるだけでなく、しだいに家そのものの名、すなわち家名（この場合は家名といって苗字だけではなくて屋号）の役割をはたすようになってくる」という〔坂田二〇〇六、九三〕。そして「苗字は屋号と化した字（通名）」とともに、子々孫々に至るまでの超世代的な永続を何よりも希求する日本の家に固有の名前、すなわち家名」であると述べている〔坂田二〇〇六、一六五〕。また「家名（苗字・屋号）が成立するのは、早くて一四世紀後半、一般化するのは一五世紀後半から一六世紀前半」であるとする〔坂田二〇〇六、一六八〕。近江においても通名は個人名であると同時に襲名によって通名を継承することで家の系譜を示せたため、通名は「家の名」ということができる。通名は現在で言うところの屋号であり、また苗字でもあった。

しかし、近世に苗字の働きを持つ通名があったからといって、苗字がなかったというと必ずしもそうではない。それは、これまでの苗字の歴史に関する様々な研究が明らかにしているところである⁴。またA地区では、苗字が記載された近世期の古文書がわずかながら残されている。近世に神職の把握、統括、任命をしていた吉田家、白川家が発給した神道裁許状には、それぞれに苗字が記されている。神道裁許状によって、一年交替の廻り神主であっても、神主であることが認められた。神主という特権的な身分であることを示すため

に苗字を書き記していたのであろう。しかし、それは廻り神主という一年間に限られたことであり、日常生活において苗字は使用されていなかったと考えられる。

第三節 近代移行期における名前の変革

前節では祖名屋号の名前は近世から使用されており、また代々襲名されてきた通名であったことがわかった。そして通名は苗字のない近世に、苗字の代わりを果たし、個人名であると同時に襲名によって通名を継承することで家の系譜を示せたため「家の名」であると言える。この通名こそが、祖名屋号の起源であると言えよう。個人名でもあった通名は、個人と家の両方を示すことができたが、屋号は家を示すことはできても個人を示すことはできない。なぜ家のみを示す屋号となったのであろうか。

それには、近代移行期の名前に関するいくつかの法令が影響している。明治三（一八七〇）年第八四五号太政官布告において、

自今旧官人元諸大夫侍並元中大夫等位階総テ被廢候事

一 国名並ニ旧官名ヲ以テ通称ニ相用候儀被停候事

と国名・旧官名を通称（通名）に持つことを禁じた。武士が実名

とは別に日常に用いた通名には、国名や旧官名が多く用いられていた。それは武士の通名に限らず、百姓や町民の名前にも広く使用されていたのである。旧官名とは、かつての律令制における官職の名前のことをいう。例えば、源右衛門、市左衛門といった衛門名は衛門府の官職名に由来し、勘兵衛、九兵衛といった兵衛名は兵衛府の官職名に由来する。また、助、介、佑、丞、大夫、佐、進、藏なども官職名である。本来は官職にある者が名乗る名前であったが、これらが官職名であるということが忘れられ、通名に用いられるようになったと考えられている〔井戸田一九九三、二一七〕。

明治二（一八六九）年七月に官制の大改革が行なわれ、職員令に基づく官職名が制定された。当時、官員の名前は苗字と通名で表す風習があり、衛門・兵衛などの旧官名を通名に用いると、在官者の官名か、官に関係のない名前なのかが紛らわしいこともあり、明治三年に旧官名の使用は禁止となる〔井戸田一九九三、二二〇～二二一〕。しかし、苗字にも実名にも匹敵する通名しか持たなかった庶民においては、衛門名や兵衛名など官名が多く使われており、改名を余儀なくされた。近世初頭から代々受け継がれてきた通名はここにおいてひとつの終焉を迎えたと言えよう。

また明治政府は、近代的な中央集権国家実現のため、国民すべてを氏と名で掌握することが必要であった。そこで明治四（一八七一）

年に戸籍法が公布され、翌五年から施行される（壬申戸籍）。これは、生死等の身分事項を登録するとともに、徴兵、徴税、治安警察などのための行政的戸籍の面を持ち、全国民を把握統制するための国家の基本帳簿とされた〔井戸田二〇〇三、八九〕。これに先立って出されたのが、明治三（一八七〇）年太政官布告第六〇八号「自今平民苗氏被差許候事」である。これにより、国民すべてを戸において、苗字と名で特定することが苗字の許可、戸籍法の公布によって可能となるはずであった。しかし、苗字を公称することを許されただけで強制ではなかったため、苗字を付けない者が多く、それは実現しなかった。そこで、政府は明治八（一八七五）年太政官布告第二二号として、

平民苗字被差許候旨明治三年九月布告候処、自今必苗字相唱可申、尤祖先以来苗字不分明ノ向苗字ヲ設ケ候様可致、此旨布告候事

といわゆる「平民苗字必称令」を布告する。ここに至って、平民は苗字を公称する義務を負い、全国民が苗字を持たなければならなくなった。

滋賀県では、明治三年に苗字使用の許可令以降も苗字を名乗らない者が多かったようで、明治五（一八七二）年に滋賀県庁より以下の布達が出された。

人民溜所揭示

先般平民ニ至ルマテ苗字被差許ノ御布告有之候処、其後モ願伺書等名前ノミニテ苗字不相認者間々有之甚御趣意ニ反シ候條以後ハ必ス認入可申事

壬申七月 滋賀県庁⁵

苗字を名乗ることを許されたにも関わらず、願伺書などに名前だけで苗字が書かれていない。それは御趣意に反するので必ず苗字を名乗るように、また先祖以来の苗字がわからなければ新たに苗字を設けるようにとのことである。そして明治八年には、苗字必称令を県下へ布達している。

第百六十号

別紙之通御達ニ相成候條管内工無洩布達するもの也

明治八年二月十九日 滋賀県令松田道之代理

滋賀県参事籠手田安定

第式十式号

平民苗字被差許候旨明治三年九月布告候処自今苗字相唱可申尤祖先以来苗字不分明ノ向ハ新タニ苗字ヲ設ケ候様可致此旨布告候事

明治八年二月十三日 太政大臣三条實美⁶

苗字の使用が許可されると、これまで家を示す働きを担っていた

通名と苗字のふたつが「家の名」として存在することになる。しかし、家を示す働きをもった苗字が地域社会において制度上認知されると、苗字の代わりを担った通名はその役割を失うことになった。また、国名・旧官名の禁止によつて通名の改名がなされ、近世を通して使用されてきた通名は終焉を迎える。ところが、通名は家を示す働きのみを有した屋号へとそのかたちを変えて、現在まで受け継がれていくことになる。

さらに、明治五年には太政官布告二三五号により、戸籍に登録した名前を改名することが禁止された。

華族ヨリ平民ニ到ル迄、自今苗字名並屋号共改称不相成候事

但、同苗同名ニテ無余儀差支有之者ハ、管轄庁へ可願出事

戸籍を有効にするために、苗字や名前を自由に改名することが禁止される。しかし、同苗同名の場合で差支えがある場合には届け出ることで改名が許可された⁷。これにより、原則改名が禁止され、これまで行なってきた家督相続の際の襲名によつて改名することが禁止された⁸。改名が禁止されたことも、通名が屋号となったひとつの要因であろう。

しかしながら、C地区では昭和二〇（一九四五）年ごろまでは襲名による改名が行なわれていた。C地区の公民館には、明治三六（一九〇三）年以降の歴代区長の名前が書かれた木札が掛けられている。

これを見ると、襲名が行なわれていた時期を読み取ることができる。ここに見える名前と表2・3の屋号が一致しているものは、カワヒコ、シロスケ、シロベエ、ゴロベエ、タサブロウ、トウベエ、ヤスベエの七軒であった。

現在では戸籍法に基づく法的な手続きが面倒であるなどの理由から行なわれていないが、明治以降に行なわれた襲名にも様々な法的手続きが取られたと推測できる。最後に行なわれた襲名は、カワヒコ家の彦三郎という名前で、戦後すぐであったと言う。それまでは旧家であれば襲名するのが当たり前とされていた。この襲名は、近世に行なわれていた通名の襲名と同様であったと考えられる。中山道に沿うC地区には商店が多かったことから通名が商売を行なう上で重要視されていたため、近代になっても襲名が行なわれた。つまり、法的に禁止されて以降も襲名を続けていく必要があったのは商家であり、農家では襲名を続ける必要はなかったと言えるだろう。

第四節 屋号と苗字

近世における「家の名」は通名だけであったのに対して、明治期に入ると苗字と屋号というふたつの「家の名」が用いられるように

なる。ここでは屋号と苗字の関係を明らかにしたい。

井戸田博史は、「平民一般がかならずしも苗字を必要としたのではなかった。移動性の少ない閉鎖的な社会では、百姓町人にあつては代々「家名」として襲名してきた」名前で不自由はなかったとしている〔井戸田一九八六、五三〕。苗字を持つことが地域社会において認知されたと先述したが、はたして苗字は必要であったのだろうか。そもそも通名という「家の名」があつたにもかかわらず、明治政府の政策によって、新たに苗字を設ける、また苗字を公称することができるようになり、明治期以降は屋号と苗字というふたつの「家の名」が両立することになる。しかしA地区やB地区では、現在も苗字ではなく屋号で家を指していることから、通名を引き継いだ屋号のほうが苗字よりも「家の名」としての使用頻度は高いと言える。屋号が生活の中で充分に定着していたため、苗字は「家の名」となりにくかったと考えられる。宮本常一は『忘れられた日本人』のなかで、大阪府河内長野市滝畑では「明治になって苗字をつけるとき大抵は屋号を苗字になおした」と記している〔宮本一九八四、二三九〕。元々あつた屋号を苗字へと転換していることから、屋号が「家の名」として広く使用されていたため、苗字に改めたと考えられる。

つまり、屋号を使用することで家を十分に特定できたため、使用

を許可されるか新たに設けられた苗字をわざわざ使用する必要はなかったということになる。屋号による家の特定が可能であったため、日常生活において苗字を必要としないのは、現在のA地区やB地区においても当てはまる。極論ではあるが、屋号が広く使用されている村落内において苗字は「家の名」として定着していないと言えるだろう。

戦後の屋号の使用について梶田純子は、屋号は「戦後、家制度の崩壊に始まって若者の農村離れ、世代間のコミュニケーション断絶、近所付き合いの減少等、社会変化と共に消えつつある」と述べている〔梶田一九九五、四一一〕。事例二で概観したB地区では過疎によって屋号は失われつつある。またC地区では、戦前に広く使用されていた屋号は、戦後の人口増加などから屋号のみでは対応しきれなくなり、しだいに使用されなくなっていく。C地区においてはB地区の事例に見られるように過疎が原因で屋号が失われるわけではなく、人口が増加することによって屋号が失われたという正反対の要因がみられる。もちろん、人口増加のみが屋号衰退の要因ではない。

人口の増加に加えて、転出入が多いため定住率が低く、C地区の固定成員の変化が著しいことから、屋号単一での家の特定は不可能になったことも原因として挙げられるだろう。苗字が家の呼称として常用されたことによって、屋号は衰退してしまい、その替わりに苗

字が「家の名」として広く使用されるようになったと考えられる。

以上のことから、明治期になり、苗字が使用されるのと同じ時期に、個人ではなく家を指す呼称として、集落内の家々のみを区別するという機能を持った屋号が誕生したと言えるだろう。明治期に誕生した屋号は、近世以来長く「家の名」として使用されてきた通名が変化したものである。つまり、家・個人両方を示す働きを持った通名が、家を示す働きのみを有する屋号へと変化したと考えられる。しかし、双方ともに「家の名」であることには変わりない。まず通名があり、明治期になって新しく苗字という「家の名」ができたことすれば、B地区のように異苗字が多種ある地域にも屋号があることに説明がつく。苗字が「家の名」として一般化し定着すれば、C地区のように屋号は衰退していくのだろう。同苗字が多い地域では苗字による家の特定が困難なため、苗字が「家の名」として定着しない。つまり、同苗字の家が多いため、苗字が「家の名」となり得ないのである。

小 結

以上のような分析から、次のように結論付けることができるだろ

う。近江における屋号の地域的特徴として、屋号は家の系譜につき、祖名屋号が主たる屋号であるという点が挙げられる。そして苗字が使用されなかった近世に、代々襲名され、苗字の代わりを果たしていた通名が、祖名屋号の起源になったといえるだろう。近世における通名は、家とさらに個人を示すことができた。序章冒頭で、屋号とは個人ではなく、家を指す時に用いられ、苗字は家と個人を指す働きを持つと述べた。つまり通名は、屋号と苗字、両者の機能を併せ持った「家の名」であった。

明治期以降、苗字を持つということが地域社会において認められたため、通名は苗字の代わりを担うという役割を事実上失うことになった。そこで、通名は失われてしまうかと思われたが、「家の名」として非公式な名前で記されることのない屋号へとその形を変化させたのである。

苗字と屋号の関係については、近代になり苗字の必称によって、新たな「家の名」が誕生する。それまで重用されてきた通名に加えて、苗字も「家の名」として使用されるようになった。苗字の必称によって、屋号は家を特定する役目を、苗字に譲渡することになったのである。苗字を使用し始めた時点で、屋号はいずれ衰退する可能性を持ったと言えるだろう。しかしながら、近代から現代に至る変遷過程のなかで、屋号は明らかに衰退しているものの、同苗字が

多い地域ではとくに苗字が村落内において「家の名」として定着していないため、A地区やB地区のように今も使用されている地域も少なくないことを再び記しておくことにしたい。

¹ 「祖名」という言葉は家の祖を指すが、ここでは象徴的な先祖を指して使用している。

² 一代がおおよそ三〇年と考え、三〇年おきの史料を検証した。

³ 永田メアリーは、一字を継いでいく通字の慣行を通名の襲名と同等のものとしてとらえる一方、森謙二は名の一字継承は跡継ぎ以外の子どもにも行なわれるが、襲名は家の跡継ぎのみが継承するものであるとした〔永田二〇〇六、森二〇〇六〕。通字の慣行については、実名の継承に関わる習俗であるため、通名とは異なる。しかし永田の言うような庶民の家督相続にともなう通名の一字継承は「家の名」にあたるのか、今後検討していく必要がある。

⁴ 洞富雄一九五二「江戸時代の一般庶民は苗字を持たなかったか」『日本歴史』五〇、豊川武一九七一『苗字の歴史』中央公論社など。

5 『明治五年滋賀県治撮要 一』（滋賀県文書）

6 『明治八年 本県無記号達 参』（滋賀県文書）

7 明治九年太政官布告五号、明治一三（一八八〇）年太政官指令によつて、改名禁止は緩和され、同苗同名に加えて、営業の都合や由緒、その家の者の都合によつて、改名が許可される事例が増加するようになる〔井戸田二〇〇三、九三〜九四〕。

8 滋賀県では、太政官布告が出された翌月九月に滋賀県内に通達が出されている。

『明治五年 本県無記号達編冊 三』（滋賀県文書）

華族ヨリ平民ニ至ル迄自今苗字名并屋号共改称不相成候事

但同苗同名^{ニ而}無余儀差支有之者ハ管轄庁^江可願出事

壬申八月廿四日 太政官

右之通被

仰出候条管内^江無洩相達する者也

壬申九月 滋賀県庁

第三章 「家の名」の生成と継承

はじめに

前章において、近江における屋号の地域的特徴および屋号の成立過程を分析し、近世における通名が近代になり、「家の名」としての役割や意味を持ち続け、屋号へとその形を変化させたことを明らかにした。また苗字の必称によって、屋号は家を特定する役目を、苗字に譲渡することになり、屋号はいずれ衰退する可能性を持ったことを指摘した。早川孝太郎も「苗字がある限り、わざわざ煩はしく家名を言ふ必要もなかったので、その点でも、家名はもう前代生活の残存である」と指摘している（早川一九三一、三五）。しかしながら、明治以降においても屋号が新たに生み出されていたという事実を無視することは出来ない。

岡野信子は『屋号語彙の開く世界』のなかで、屋号の命名には、名乗り屋号、共同命名屋号、拝領屋号の三パターンがあり、共同命名屋号には、村人がいつ知らずに呼んで定着した屋号と、村人が集まって決めた屋号があると述べている。また、屋号が命名され、披露されることによって、集落の人々に承認されることが肝要であっ

たという事例も紹介している（岡野二〇〇五）。これらは、おそらく近代、もしくは現代に命名された屋号の事例紹介であると考えられる。前章では、近世から現代にいたる歴史的な考察から通名が屋号へと転じたことを明らかにしたが、この場合、岡野の唱える命名の三パターンには当てはまらないと言えるだろう。岡野の研究は、あくまでも屋号語彙に基づいており、屋号の地域的特徴や使用方法、使用目的、歴史的考察などから、屋号の生成について考察を加えていかなくはならない。

本章では、第二章で取り上げたA地区とB地区を事例に、世代および男女の違いによる屋号の使用、継承方法を明らかにしたうえで、苗字という「家の名」があるにも関わらず近代以降も生み出され続けた屋号の特徴を考察していく。また、近世から継続して使用されている祖名屋号と明治以降に生み出された屋号の違いなども検討したい。

第一節 屋号継承の方法

まずは屋号の継承方法について、B地区の事例から見ていこう。

B地区では全六八軒のうち二八種の苗字が存在し、同一の苗字は多

表3-1 B地区の屋号数

	屋号数	近代に生成
祖名屋号	40	3
職業屋号	1	1
商売屋号	3	3
地名屋号	1	1
系譜屋号	2	
不明	2	
合計	49	8

くても一〇軒程度であるにも関わらず屋号は年配者を中心に日常的に使用されている。六八軒の内、屋号のある家は三五軒である（平成二三（二〇一一）年四月）。B地区では、分家や他地域から転入してきた家は原則として屋号を持たない。屋号は家に付くものであるため、家が村落から転出したり、絶えたりするとその時点で屋号は消滅する。そのため、屋敷はあるが誰も住んでいない家や、家屋は取り壊されて、土地のみを所有する家など、かつて使用されていた一三の屋号を含めて、合計四八の屋号を確認している。ただし、ふたつの屋号を持つ家があるため、実際に屋号の総計は四九となる。

すべての屋号を整理、分析すると、B地区の屋号は、①祖名屋号、②従事していた、もしくは従事している職業に依拠した職業屋号、③商売をしていたときの店名や商号が屋号となった商売屋号、④小

字名などの地名を使用した地名屋号、⑤本家・分家関係を示す系譜屋号の五つに分類できる。その中でも近代になって誕生したと判明している屋号は八あり、その数は祖名屋号が一、職業屋号が一、商売屋号が三、地名屋号が一である（表3・1）。一覧したのが表3・2となっている。詳しく見てみると、祖名屋号の三つ

表3-2 B地区における近代以降に誕生した屋号

	屋号	分類	その他
1	キダ(キダエモン)	祖名	2代前に分家。
2	ヨジサン(ヨジロウサン)	祖名	2代前に分家した人の名前
3	チョウサン	祖名	
4	タタミヤサン	職業	戦後すぐに商売をやめる。
5	カメシヨ	商売	店名
6	ツチダ	商売	ツチダという店から品物を卸していたことからツチダと呼ばれる
7	アサヒヤ	商売	店名(酒屋)
8	フキアゲ	地名	字吹上から移住

は比較的新しく分家した当主の名前が用いられ、ヨジサン、チョウサンは名前と敬称が組み合わされている。前章で示したように、ゝヘエ、ゝザエモン、ゝモンとつく祖名屋号は古い家とされており、近代以降に生成されたキダはイレギュラーなものと言えよう。また、B地区における職業屋号、商売屋号、地名屋号はすべて近代になってから生成されている。B地区では、全戸に屋号が付いているわけではないため、屋号のついていない家と呼ぶときにこそ、屋号が生み出される過程を窺い知ることができると仮定した。そこでまず、世代の違いおよび、男女の違いによって、屋号の使用、継承方法にどのような差異があるのかを検討してい

きたい。

屋号は主に会話の中で使用され、書き記されることはない。屋号

を使用しているのは五〇代より年配の人がほとんどで、一〇代、二〇代の人になると、全く知らないという人までいる。四〇代までの人々は、自家と近所が屋号の認識範囲となっており、世代によって屋号の認識度に差異が見られる。これは屋号を使用する機会や覚える機会が少ないまま、高校や大学進学とともにB地区を離れる人が多いことが原因であろう。

五〇代以上の男女に「屋号をどのようにして覚えたか」と質問したところ、ほとんどの人が「周囲や両親が使用しているのを聞いて覚えた」との回答を得た。しかしながら、周囲の人々が使用しているのを聞くだけで、村内すべての屋号を覚えることができたとは考えにくい。そこで、B地区に生まれ育った男女の屋号の認識度や使用頻度、覚え方について見ていく。

大正九（一九二〇）年生まれの人Aさん（男性）は、全戸の屋号を認識しており、村の本分家関係も熟知している。Aさんも、親や周囲の人が使用するのを聞いて屋号を覚えたというが、屋号をほとんど知らない一〇〜二〇代の男性や、自家と近所の屋号のみを認識している四〇代の人と異なる点がある。それは、村落組織における役職や祭祀組織の役職の経験の有無である。B地区に生まれ育った男性にとって、一番初めに属する村落組織が若連中（青年団）であり、役職がアルキである。

青年団は、公民教育を目的に日露戦争後、全国の町村を単位として結成された「岩田一九九六、九三〜一〇二」。B地区の場合、若連中と呼ばれる組織を、明治四一（一九〇八）年に青年団へと転身する。当時の青年団規則によれば、一家の相続者となる男子は一七歳になると第一種団員として入団し、それ以外の男子は第二種団員として一五歳で入団すると記されている。厳格な年齢階梯制社会であるB地区において、若連中に属さなければ祭祀組織である社中に入る権利を得ることができず、若連中に加えることは男性がB地区で暮らしていく上で重要なことであった。そのため、養子に來た者も年齢に関係なく若連中へと入ることになっている。加入して1年目の者を「コワカイシユ」、二年目の者を「アルキ」もしくは「使丁」、三年目から二三歳までの者を「チューロー」、二四歳から若連中を抜けるまでの者を「カンブ」と呼んだ。アルキは毎晩、区長の家に行き、区長から出される連絡事項をその日の内に数人で分担して村の全家を回って伝えるという役目を果たした。アルキの人数が少ないときは非常に大変だったと言う。アルキを行なうことで、村内の家々を回ることになり、本来であれば接点の少ない人々とも会話をする機会が格段に増える。このことが村の全戸の屋号を覚える契機になったと考えられる。今でこそ六七軒と少ないが、大正六（一九一七）年には一〇九軒あり、家の数も多かった。実際にAさんが

屋号を覚えた方法のひとつとして、アルキを経験したことを挙げている。

この事例から、男性が屋号を覚える要因として「アルキを行なう」ということも重要であったと推定される。

これに対して女性はどうだろうか。昭和五（一九三〇）年生まれのBさん（女性）はB地区で生まれ育ち、県外の男性と結婚をしたが、村外へ出ることなくB地区に住み続けている。彼女は、属している村組全戸の屋号を認識しており、自身の属する村組に接する組の屋号もほぼ認識していた。しかし、他の組の屋号は半分ほどしか分からなかった。彼女もまた、親や周囲の人が使用するのを聞いて屋号を覚えたという。もともと全戸の屋号を認識していたわけではないが、近年では、足腰が弱り、集まりの場など外に出る機会が減ったことによって、近所の人など限られた人しか会話をしなくなってしまった。そのため、近所の屋号しか使用しなくなってしまったことから、使用しなくなったほかの屋号は年々忘れてしまい、すぐに思い出せなくなっているという。

この事例から、B地区で生まれ育った女性は、同じ組内や隣の組の屋号は認識していても、村の全戸の屋号は認識していないと言える。これは、女性の行動範囲が屋号の継承に関係していると考えられる。そのため、B地区へと嫁いで来た女性も同様のことが言える

だろう。村外から嫁いだ女性の方が屋号に接した年月が短いことから、屋号の認識度は低いと考えることもできる。

一方でAさんのようにアルキを経験した年配の男性が全戸の屋号を認識していた理由として、祭祀組織、村落組織などの役割に付く必要がある、その社会的な役割から屋号を覚える必要があった。

現在、若い男性は若連中に加入しても、大学進学のため村を出る人が多い。若連中の仕事と言えば、盆に帰省した際に、盆踊りの手伝いを行なう程度である。アルキは一九九〇年代のはじめになくなってしまったため、三〇代以下の人たちは経験していない。そのため、アルキを経験していない世代は屋号を使用している人々と関わりを持つことができず、多くの屋号を覚える機会が持てなかったため、全戸の屋号を認識できないと言えよう。また、アルキをはじめ、若いうちに経験するべき役割につくことがなくなってしまった現在では、屋号を覚える必要もなくなってしまった。

一〇代の男性にも「屋号をどの程度知っているか、また、どのようにして覚えたか」と質問してみたところ、「家の祖父母が使用しているのを聞いて知っている」という返答であった。五〇代以上の人たちが「両親」「周囲」と答えているのに対して、一〇代の男性は「祖父母」と答えている。現在B地区では、年配者だけが屋号を使用しており、少子高齢化を受けた過疎化の進む地域ということもあって、

一見屋号は日常的に使用されているように見えるが、屋号を使用する人は減少している。屋号使用者の減少は、屋号を覚える機会がなくなることへと繋がり、次世代に屋号が継承されなくなると予想される。

第二節 屋号生成の要因

続いて近代において屋号はどのように生み出されたのかを考えていきたい。前節において、屋号を継承していく過程において屋号使用者との会話が重要であることを述べた。これを踏まえて次の事例を見ていく。

C家は、ヒョウヨモンという家のシンヤであり、二世代前の戸主は、「サンヤン」と呼ばれていた。前戸主Dさんと同世代の人びとは、C家を指す場合「サンヤン」を屋号のように使用している。Dさんと同世代であったEさんによれば、両親がC家を呼ぶときに「サンヤン」と言っていたために、この家のことを「サンヤン」と呼ぶようになったという。

このようにB地区では屋号のない家について会話の中では、戸主の名前か一世代前の戸主の名前によって指し示している。ここでは、

サンヤンという戸主の名前が屋号のように使用されていた。たとえば、屋号の継承過程において、一番身近な使用者である両親が、一世代前の戸主の名前で屋号のない家を指し示したなら、それを屋号と捉えて親を真似、本人を知らなくともその家を一世代前の戸主の名前で表すようになると考えられる。親と同じ呼称を使用することで共通の認識を持ち、相互にコミュニケーションを図ることができ。一世代前の戸主が呼ばれていた名称が、家を指し示す名前、つまり屋号になる可能性が生じる。このように一世代前の戸主の名前が屋号のように使用されているのを、その戸主を知らない人が聞いた場合、屋号と捉えてしまう可能性がある。事実、筆者も当初はサンヤンを屋号であると考えていたが、話を伺っていくなかで屋号ではないことに気づいた。しかし、サンヤンを屋号として認識し、使用している人々もいる。この事例は、屋号が生成されるひとつの要因を暗示しているのではないだろうか。世代の隔たりによって会話の中で戸主名の意味の錯誤、あるいは展開が起こり、それが継承された結果、新たに屋号が生成されていったと考えられる。

このほか、アサヒヤも当初は店名として呼ばれていたのが、いつしか家を指す屋号となったと考えられる。インキョにしても、「ハチザエモン」の隠居であるF家」と言うような会話の中で、次第に「インキョ」と呼ばれるようになり、それが屋号となったと推測される。

会話の中で繰り返し家を指す名称として使用され続けることにより、屋号へと転じたのであろう。

以上のことから近代に屋号が生み出される要因のひとつとして、日常の会話の中で生じたという点を指摘することができる。

第三節 生み出される屋号の特徴

続いてA地区の事例から、屋号になりやすい名称を探っていく。

A地区において村入りをしている一二軒のうち屋号を有する家は九四軒である。これら九四軒の屋号と転出してしまった家や絶えてしまった家の屋号を合わせて、一一一の屋号を確認している。屋号は家に付くもので、村外へ転出する際には、屋号は失われることになり、村内の移動については屋号を伴って移動をする。そして、屋号は新たに分家した家や転入してきた家にはなく、数世代に渡ってA地区に暮らす家にはあるという。つまり、分家した家でも、長くA地区に居住している家には屋号がある。屋号は永久的なものであり、変更されることはほとんどない。その有効範囲はA地区の集落のみで、他所では通じず、さらに書き示すものでもない。

A地区の屋号を命名理由や由来による分類を行なってみると、①

表3-3 A地区の屋号数

	屋号数	近代に生成
祖名屋号	86	11
職業屋号	10	9
商売屋号	7	7
地名屋号	3	3
系譜屋号	4	4
苗字屋号	1	1
総計	111	35

祖名屋号、②職業屋号、③商売屋号、④地名屋号、⑤系譜屋号、⑥苗字が屋号となった苗字屋号の六つに分類することができる。先祖の名前を使用したと考えられる祖名屋号は、八六あり、全体の約八割を占めていることから、A地区において主たる屋号である。

表3-3、表3-4は近代以降に誕生

したとわかっている屋号の一覧である。祖名屋号は、先祖の名前を使用した屋号であり、その起源は通名にあると前章で明らかにしたが、祖名屋号は大きくふたつに分けることができる。ひとつは通名を起源に持ち、先祖代々受け継がれてきた名前が屋号となっているもの、もうひとつは、ナカトラというように苗字の頭文字を一字、個人名の頭文字を一字取って組み合わせられ命名された屋号やキンサンのように個人名の語尾に「さん」という敬称がつけられたものである。これらは、どちらかといえばニックネームに近いが、先祖の名前を表していることには違いない。この祖名屋号に用いられる先祖の名前は、通名を起源に持ち、近世以来用いられてきたクヨモンやタロベエといった屋号に対して、一く三代前の戸主の名前を用いている場合が多い。続いて、従事していた、もしくは従事してい

表3-4 A地区における近代以降に誕生した屋号

	屋号	分類	その他
1	タキサン	祖名	タキチという人がいた
2	スエハル	祖名	先代の名前
3	ナカミ	祖名	
4	オハマサン	祖名	明治生まれのおハマさんという人女性がいた。
5	マキタケ	祖名	
6	ミズイチ	祖名	
7	ミズロク	祖名	分家をした人が6人目の子供だった。
8	ナカトラ	祖名	
9	カンジロウ	祖名	
10	キンジ	祖名	先代の名前。
11	キンチャン	祖名	
12	カシヘエ	職業	昭和初期まで菓子屋。
13	カジヤ	職業	昭和初期まで鍛冶屋。
14	ニンギョウヤ	職業	転入。昭和の終わりまで人形屋。
15	カワラヤ	職業	瓦屋・暖簾分け
16	ザイモクヤ	職業	昭和の初めに転入。
17	オケヤ	職業	桶屋。戦後、転入。
18	カシマサ	職業	菓子屋だった。
19	ゲタヤ	職業	昭和初期に下駄屋を始める。
20	コウヤ	職業	昭和20年代に産婆をしていた
21	ヤマキユウ	商売	
22	マスチョウ	商売	明治から酒、つくだに販売
23	オウミヤ	商売	戦後から近年まで佃煮屋を営んでいた。
24	キタタツ	商売	昭和に転入。
25	ナカセン	商売	
26	フルタ	商売	明治初期から昭和60年ごろまで佃煮屋。
27	キンロク	商売	先代がキンロクという店に勤めていた。
28	タンバ	地名	大正の初め、丹波から転入。
29	カタタ	地名	昭和の初め、堅田から転入。
30	イシバ	地名	石庭から転入
31	ゲンダイガメ	系譜	大正のころ、分家する。
32	ソウジ	系譜	明治のころ、ソウダより分家。
33	クヨモンマサ	系譜	明治の終わりごろにクヨモンより分家。
34	ハンベエトヨ	系譜	明治の初めにハンベエより分家。
35	イマニシ	苗字	明治に苗字を変更。

る職業に依拠した職業屋号であるが、A地区では、一〇の職業屋号がある。それは、カシヘエやカジヤといったものであるが、この内、九つが近代以降に誕生した屋号である¹⁾。これらの職業は、明治から昭和初期にかけて開業した職業であり、開業と時期同じくして屋号になったと考えられる。前節で指摘したように、これらの職業名も会話のなかで使用されるうちに屋号として定着していったのであろう。

また、商売屋号も職業屋号と同様のことが言える。商売屋号は商売をしていたときの店名や商号が屋号となったものであり、A地区に六ある商売屋号のうち、すべてが明治から戦後すぐまでに開業している。これも会話の中で使用されるうちに屋号になったと考えられる。しかし、現在では職業屋号、商売屋号を持つ家のほとんどがすでに屋号になった職業、商売を行っていない。しかし、これらは屋号として残り、現在も使用されていることから、その商売を営んでいたことを知らない人でも、かつての職業、商売をうかがい知ることができる。それはその家の人間でも例外ではない。たとえば、ゲタヤの小学生

の子どもは、自分の家の屋号がゲタヤであると知ったときに、まず、ゲタヤ（下駄屋）が何かわからなかった。父親にゲタヤの意味を教えてもらい、初めて自分の家がかつて商売をしていたことを知ったのである。この点から屋号は家の歴史を物語るものであると言えよう。

続いて、小字名などの地名を使用した地名屋号である。A地区に三あるうち、すべて明治時代に屋号として成立している。A地区では小字名ではなく、地名を用いている。地名屋号を持つ家は三軒ともに他所から転入してきた家である。そのため、タンバ（丹波）やカタタ（堅田）などA地区へ転入する前に住んでいた地域の地名が用いられている。

本家・分家関係を示す系譜屋号についても大正時代までに分家した家へと付けられている。オモヤ（本家）の屋号と分家した人の名前を足したものが、クヨモンマサやハンベエトヨである。

以上のことから祖名屋号の一部、職業屋号、商売屋号、地名屋号、系譜屋号のほとんどが明治から戦後すぐに生成されたことがわかる。近世においては、分家や転入などによって新たな「家の名」を設けるときは、通名の性質上、家の創始者の名前であった。通名は祖名屋号へとその形を変化させたことから、近世に生成された「家の名」はすべて祖名屋号になったと言い換えることが出来る。しかしなが

ら近代においては、近世期の通名の成り立ちとは大きく異なっていることから、さまざまな屋号が生み出されたと考えられる。それが職業屋号、商売屋号、地名屋号、系譜屋号であろう。なぜ通名と同じく創始者の名前が屋号とならなかったのか。それには通名が使用できなくなったこと、とくに明治五（一八七二）年太政官布告第二三五号において、原則的に苗字や通名の改名が禁止されたことで家督相続の際に行なっていた襲名に伴う改名が禁止されたことが影響していると考えられる。継承することができない個人名は屋号となり難かったのであろう。

では、どのような名称が屋号となったのか。張相彦は岡山県の事例から、屋号が「共同体の中における地形的特徴から命名して家に付ける」と述べている〔張一九九一、五五〕。張が取り上げた岡山の事例では、集落内に位置する神社を視点として屋号が地形的特徴を表していると言う。しかし、A地区においては、地形的特徴ではなく、店名や職業名、地名といったその家がもつ特徴や歴史が屋号になった。家の特徴を表すものとして商売や職業はその最たるものであったためであろう。続いて、転入者がそれほど多くなかったA地区にとって、他所からの転入は珍しいことであり、堅田から来たということそのものがその家の特徴であったと考えられる。分家した家であっても同様に、ハンベエの分家ということが特徴であった。

つまり、屋号になりやすい名称とはその家の特徴を端的に表す名称であったとすることが出来る。そして、その優先順位としてニツクネーム（祖名）よりも地名や系譜、それよりも商売や職業であった。商売や職業はもともと屋号になりやすい名称であったと考えられる。認識人類学者の松井健は「ひとつの集団内で共有されている名前によって、その集団の成員には一定のかなりの程度共有されたイメージが喚起される。名前が具体的なものではなく、その具体的なものの一般的な心像に与えられていることは重要」であり、「ある名前が与えられるときには、共通の特徴をもったものとしてイメージが構成されると同時に、そのイメージは、名前で呼ばれるもの以外とは異なるものとして構成されている」としている〔松井一九九七、二一〕。屋号になりやすかった商店名や職業は、集落内において「共有されている名前」であり、「共有されたイメージ」が持たれやすかったために、「共通の特徴をもったものとしてイメージが構成」されたと言えるだろう。

第四節 生み出され続けた屋号

なぜ、明治になっても屋号は生み出され続けたのか。それは、苗

字と屋号の関係にあると考えている。近代になって、苗字の必称とともに苗字を持つということが地域社会において認められたため、屋号は家を特定する役目を、苗字に譲渡することになったと前章にて明らかにした。

A地区では、近世に苗字を有していたことが古文書から判明しているが、公には使用することができなかったため、現在のように苗字が他者に認識されていなかったと考えられる。そのため、苗字と屋号両方の働きを持った通名が「家の名」として用いられてきた。近代になって、公に使用できなかった苗字を使用できるようになったからといって、日常で苗字を使用することが少なかったことは容易に想像できる。それまでと変わらずに通名／屋号を使用していたのだろう。明治以降も苗字が地域社会のなかでそれほど認識されず、家を特定する役目は通名／屋号が持ち続けたと考えられる。変化したことといえば、代々襲名することによって受け継がれてきた通名を襲名しなくなり、通名が屋号へと形を変えて使用されたことであった。つまり、苗字が家を示す名前として定着せず、屋号が用いられたことで、屋号は不可欠なものとなり、明治以降にも新たな屋号が生み出され続けたと言えるだろう。近世においては、分家や転入などによって新たな「家の名」を設けるときには、その当主の名前が用いられたと考えられる。それは、通名の性質上、家の創始者の

名前を代々継承していくためである。しかし、近代になって生み出される屋号は、通名とは異なるため、戸主の名前が屋号とはならず、商売や職業が屋号となったと推測できる。

苗字があるにも関わらず、新たに屋号が生成されていったことを踏まえると、最後に屋号が生み出されたと考えられる戦後すぐまでは、A地区のほとんどの家に屋号があったということになる。逆に言えば、屋号のない家はなかったであろう。原田敏明は、「名は名指さるゝものを表示する表号の一種」であるとしたうえで、「社会に新しい存在が現れたりすると、これを指示するにその名が必要となる。かくして名前は、そのものゝ存在に本来必然的な付随するものではなくして、他の人あつてそれを呼ぶために必要とするもの」と述べている〔原田一九二八、六六〕。これは名前についてであるが、屋号にも同様のことが言えよう。屋号とは家を指す名前である。苗字があつても屋号がなければ家と呼ぶことは難しく、明治以降に屋号が次々に生み出されたと考えられる。しかし、A地区において現在では屋号のない家が全体の二割弱あり、戦後には新たに屋号が生成されることはなくなったため、屋号を持たない家が出てきたと考えられる。現在でも広く屋号が用いられているとは言え、一〇代、二〇代の若者世代にはあまり浸透しておらず、遠からず屋号の使用は減退してしまうことが予想される。

小 結

以上のような分析に基づく、本章では次のように結論付けることができるだろう。屋号のついていない家と呼ぶときにこそ、屋号が生み出される過程を窺い知ることができると仮定し、世代の違いおよび、男女の違いによって、屋号の使い方、覚え方について検討した。その結果、B地区で生まれ育った年配の女性は、同じ組内や隣の組の屋号は知っていても、村の全戸の屋号は知らず、一方、若連中でアルキを経験した年配の男性は、全戸の屋号を知っているということがわかった。その原因を探る中で、屋号を覚える要因として「アルキを行なう」ことが重要であった。そして屋号のない家を戸主の名前か、一世代前の戸主の名前で呼んでいたという事例から類推して、屋号が生成されるひとつの要因に、会話の中で生じたという点を指摘した。すなわち、世代の隔たりによって会話の中で戸主名の意味の錯誤、あるいは展開が起こり、それが継承された結果、新たに屋号が生成されていったと考えられる。

そこで近代に生成された屋号にはどのようなものがあるのか、A地区の事例から検証した結果、祖名屋号の一部、職業屋号、商売屋

号、地名屋号、系譜屋号のほとんどが明治から戦後すぐに誕生したことが明らかとなった。そして、屋号になりやすい名称とはその家の特徴を端的に表す名称であったと言える。その優先順位としてニックネーム（祖名）よりも地名や系譜、それよりも商売や職業であった。商売や職業はもともと屋号になりやすい名称であったと言えるだろう。

なぜ近代以降、屋号が生み出され続けたのかについて、苗字と屋号の関係から考察を加えた。明治期になり、苗字の使用が認められたからと言って、広く使用されたとは言えなかった。つまり、苗字が「家の名」として定着せず、それまで使用していた通名／屋号を用い続けたのである。しかし、分家や転入した家には屋号がなかったため、新たな屋号が生み出され続けたと考えられる。このまま屋号のみが「家の名」として使用され続けていけば、屋号を持たない家などないことになる。しかしながら、おそらく戦後あたりから屋号はそれほど重要ではなくなったのであろう。そのため、新たに屋号が生成されることはなくなってしまい、屋号を持たない家が増えることになった。

現在使用されている屋号はすべて同列に扱われているが、家を表すシンボルとしての通名を背景に持ち、近世から連続して受け継がれてきた祖名屋号と、近代になって苗字の代わりとして用いられ、

家の特徴を示す職業屋号や商売屋号とでは、成り立ちも性質も大きく異なる。今回取り上げたA地区、B地区のどちらにおいても、転入してきた家や分家に屋号は付かないと言っているにもかかわらず、職業屋号や商売屋号といった新たな屋号が生み出され、転入した家や分家に付けられてきた。B地区では、祖名屋号以外は屋号でないとされているものの、職業屋号などは祖名屋号と同列の存在として使用され続けている。

成り立ちこそ異なるものの屋号を地域社会のなかで共通の認識を持つて家々を区別する名前、家の系譜を示すことのできる名前と定義すれば、そのすべてが屋号であると言うことができるだろう。

¹ カワラヤのみ幕末にA地区へ転入してきた家である。

第四章 「家の名」の名付けと家意識

はじめに

第二章、第三章において、近代における屋号の生成には個人名、もしくはニックネームが取り入れられており、また屋号は個人名の名付けに大きな影響を及ぼしていることを述べた。現在、出生時の命名によつて屋号と同じ個人名を持つ人、屋号に因む個人名を持つ人が少なからずおり、個人名に屋号が取り入れられていることがわかる。屋号に因む個人名は「家を示すことのできる個人名」とも言え、すなわち「家の名」の名付けが行なわれていたと言えよう。「家の名」と個人名は相互に影響を与えあってきたにも関わらず、個別に研究が行なわれ、両者を関連つけた研究が行なわれていない。屋号、苗字、通名という「家の名」を研究するうえで、名付けをはじめとした個人名にも目を向けなくてはならない。

「家の名」の名付けは、祖名継承による名付けと結びつく。祖名継承法は一九八〇年代上野和男によつて提唱された名付け方法である。祖名継承とは、何らかの関係にある先祖の個人名の一部、もしくは全部を継承して子どもに命名する方法であり、また、特定の先

祖の名をとつて子どもに命名することで正常な子どもの社会的地位を示すと考えられる命名法である〔上野一九八二・二四九～二五〇〕。第一章で示したとおり、祖名継承研究において指摘されている問題を踏まえ、近世から近代移行期を含む祖名継承の歴史の変遷、地域社会における祖名継承の頻度、なぜ祖名継承による命名を選択したのかを明らかにし、「家の名」の名付けという視点から祖名継承について再検討していく。そのうえで、「家の名」と近代の家意識について考察する。

明治初頭に名前に関する法令が現代の名前の在り方を形成したことを踏まえつつ、歴史性を問うためにも、近世と現代と長い時間軸のなかで、A地区を事例に「家の名」の名付けについて見ていく。

第一節 近世における「家の名」の名付け

(1) 通名と子どもの名前

子どもの名前は現在、戸籍法によつて出生後一四日以内に出生届を役所へ提出することが定められており、基本的には届け出た名前を生涯使用していく。しかし、近世において、個人名は現在のように生まれた時に命名されたものを一生使い続けるのではなく、人生

の節目において幾度も代わるものであった。庶民の男性の場合、まずは出生時に名付けられる幼名があり、成人して成人名に改め、そして家督相続の際には戸主名である通名を襲名する。家督を譲ったものは隠居して、隠居名がつけられ、死後には戒名が付与される。また、改名も自由に行なわれ、人によってはいくつもの名前を同時に有することもあった。なかでも通名は家を示す名前であったがゆえに、「当主名以外の名前は一村内で重複しているのが常態であるのに対し、当主名は重複していないのは家の識別のためであり、村としても共同体規制を及ぼしていた」とされる〔大藤二〇一二、九三〕。村落内で通名の重複はなかったが、それ以外の名前、つまり子どもの名前や女性の名前は重複し、繰り返し用いられていた〔森二〇〇六、三五六〕。子どもの名前は重複しやすいものであったことに加え、改名を行なうことが前提であり、名前が固定的なものではなかった近世において、出生時に家督相続を前提とするような「家の名」の名付け、つまり通名に因む名付けはあったのであろうか。

改名を前提とした名付けのなかで、通名に因む名付けが行なわれていたのかを探るため、まず近世における子どもの名前についてみていく。なお、ここでいう子どもの名前とは、出生時に名付けられ、改名するまで用いられた幼名のことを指す。現在でも「家の名」の名付けは男性にのみ行なわれているため、近世における男の子の名

前について見ていく。

（２）家ごとにみた子どもの名前

まずはA地区に残る成人儀礼に関する史料を用いて近世における子どもの名前を見てみよう。これらの史料は同地域において、明治二三（一八九〇）年に廃止となるまで行なわれていた通過儀礼のひとつ、烏帽子着に伴う記録である。ここでは、近世部分の子ども名前について分析を行なっていく。

烏帽子着関係史料に記載されている家数は全部で一四七軒。このうち、現在まで続くと判明している家は五二軒ある。今回は近世の子ども名前を取り上げるため、明治期以降に初出する家を除くと、家数は一三二軒となる。近世から現在までつながる家は本史料からは四二軒となる。ちなみに明治期以降には登場せず、近世のみ名前が見える家数は八三軒あるが、このなかには現在まで続く家が一七軒含まれている（表４・１）。

表4-1 烏帽子着関係史料記載の家数

記載家総数	147
このうち現代まで続く家数	52
近世期から近代に記載の家数	132
このうち現代まで続く家数	42
近世期のみに記載の家数	83
このうち現代まで続く家数	17
明治以降に初出の家数	15
このうち現代まで続く家数	10

これら史料に記載された家の中から、近世から現在まで続く家を七軒取り上げて、元文四（一七三九）年～慶應四（一八六八）年までを通したそれぞれの家ごとの子どもの名前に

ついて見ていきたい(表4-2)。

事例① 新左衛門家

烏帽子着関係史料に記された新左衛門家の子どもの名前は、寛政七年「彦太郎」、文化四年「彦治郎」、文政四年「新兵衛」、天保三年「新次郎」、天保一四年「友吉、久米吉」、慶応四年「鱗吉」となっている。このうち、文政四年「新兵衛」、天保三年「新次郎」は新左衛門という通名の「新」という字から取られており、通名と一字を同じくする名前となっている。天保三年の「新次郎」は、史料に「新左衛門子、弟」と記載されていることから「新兵衛」の弟と考えられ、「新兵衛」「新次郎」は兄弟で通名に因む幼名であったと言える。

表4-2 烏帽子着にみる子どもの名前

	元文4 (1739)年	宝暦12 (1762)年	明和7 (1770)年	寛政7 (1795)年	文化4 (1807)年	文政4 (1821)年	天保3 (1832)年	天保14 (1843)年	嘉永5 (1852)年	安政7 (1860)年	慶応4 (1868)年
① 新左衛門				彦太郎	彦治郎	新兵衛	新次郎	友吉、久米吉			鱗吉
② 太郎兵衛	九郎左衛門、鶴松、馬之介	鶴治		三之丞、午之介		多四郎、乙松	兼松			菊松	
③ 九右衛門	久太郎	次介	紋太郎			喜兵衛	喜三郎		伊之助		
④ 又助	辰之介			角次郎			種次郎			元次郎	
⑤ 藤太夫	宗庄		源治郎	藤太郎		藤三郎、藤九郎	藤右衛門	藤太郎			
⑥ 源太夫	利大夫	太郎市	善太郎	善兵衛、源五郎	源治郎	藤松、藤吉、吉兵衛		源五郎	藤吉		
⑦ 三四郎			岩治郎	吉次郎、辰之助	兼恣		岩松			又吉	

烏帽子着関係史料より作成

事例② 太郎兵衛家

続いて太郎兵衛家を見ていこう。元文四年「九郎左衛門、鶴松、馬之介」、宝暦一二年「鶴治」、寛政七年「三之丞、午之介」、文政四年「多四郎、乙松」、天保三年「兼松」、安政七年「菊松」である。本史料を見る限りでは、通名に因む名前は見ることはできない。

事例③ 九右衛門家

九右衛門家の子どもの名前は、元文四年「久太郎」、宝暦一二年「次介」、明和七年「紋太郎」、文政四年「喜兵衛」、天保三年「喜三郎」、嘉永五年「伊之助」である。太郎兵衛家と同様に通名に因む名前は見られない。

事例④ 又助家

又助家の子どもの名前は、元文四年「辰之介」、寛政七年「角次郎」、天保三年「種次郎」、安政七年「元次郎」となっている。又助家においても通名に因む名前は見られない。

事例⑤ 藤太夫家

藤太夫家は、元文四年「宗庄」、明和七年「源治郎」、寛政七年「藤太郎」、文化四年「藤介」、文政四年「藤三郎、藤九郎」、天保三年「藤右衛門」、天保一四年「藤太郎」という子どもの名前を見ることができ。藤太夫家では、「宗庄」「源治郎」を除くすべてに「藤」が含まれており、通名と一字を同じくする名前となっている。また、寛

政七年と天保一四年に「藤太郎」という幼名がある。年代から考えて、祖父と孫で同じ名前であった可能性がある。

事例⑥ 源太夫家

源太夫家は、元文四年「利大夫」、宝暦一二年「太郎市」、明和七年「善太郎」、寛政七年「善兵衛、源五郎、太郎市」、文化四年「源治郎」、文政四年「藤松、藤吉、吉兵衛」、天保一四年「源五郎」、嘉永五年「藤吉」となっている。「源五郎」「源治郎」が通名と一字を同じくする名前である。また、藤太夫家と同様に、寛政七年と天保五年に「源五郎」が見受けられる。

事例⑦ 三四郎家

明和七年「岩治郎」、寛政七年「吉次郎、辰之助」、文化四年「兼泰」、天保三年「岩松」、安政七年「又吉」となり、三四郎家も通名に因む名前は見られない。

以上のように見てみると、いくつか通名に因む子どもの名前を見ることができるが、数は決して多いとは言えない。藤太夫家は毎回通名に係する名前が見えることから、この家では通名から一字を取った名付け方法が一般的であったのだろう。その一方で太郎兵衛家や九右衛門家、又助家、三四郎家のように通名に因む名前がまったく登場しない家もある。

また、藤太夫家と源太夫家に見えるように、同じ幼名を幾世代かにつける事例は珍しいことではない。徳川將軍家では代々嫡子に「竹千代」と名付けたように、嫡子の童名継承が行なわれていた。それは庶民の上層部にも見られ、親から子へもしくは祖父から孫の間で童名が継承された〔大藤修二〇一二、七七―七八〕。そしてこのような幼名の連続性について、永田メアリーは、幼名が家の命名パターンとのあいだに有した関係は自家生まれの男性成員に対する家の期待の大きさと、彼らの成員権に対する権利への期待の大きさを示すものであるとし、幼名にその家の成員と同名をつけることはまれでも、通字名がつかわれる傾向はきわめて強かったとして、幼名に通字をつける事例を報告している〔永田二〇〇六、三二―三三二〕。しかしながら、烏帽子着関係史料を見る限りでは、近世のA地区において通名に因む名付けの傾向は強いとは言えない¹⁾。太郎兵衛家や九右衛門家、又助家、三四郎家のように通名とは無関係の幼名を持つ家が多いと言えよう。

(3) 集落内における子どもの名前

続いて、集落内における子どもの名前について宗門人別帳から見ていきたい。ここでは文化一一（一八一四）年を取り上げる。なおここで言う子どもとは、出生時に名付けられた幼名が記載されてい

表4-3 文化11年宗門人別帳に見る子どもの名前

	個数		軒数	
男の子の名前	102	100.0%	55	100.0%
通名にちなんだ子どもの名前	8	7.8%	8	14.5%
干支にちなんだ子どもの名前	9	8.8%	8	14.5%
長寿の生き物にちなんだ子どもの名前	8	7.8%	7	12.7%

と考えられ、また家督を相続し、通名を襲名する可能性のある子どもとした。そのため、戸主、父、伯父、戸主の兄、戸主の弟を除く男の子を取り上げた。

「文化十一年宗門人別帳」には、八二軒の家が記載されている。このうち、分析に用いる男の子の名前は一〇二名分、家数は五五軒となる。

この男の子の名前のうち、通名に因む名前はわずか八名のみであった。その割合は全体の七・八%にとどまる。また、家数から見ても一四・五%となる。干支に因む子どもの名前が九名、鶴や亀と言った長寿の生き物に因む名前が八名あるので、特別多いということは言えない²（表4・3）。なお、通名に因む名前をもつ男の子は全員が長男であった。

乳幼児死亡率の高い時代のため、長男ではなく次男以下の可能性もあるが、少なくとも文化十一年の時点ではその家において最年長の男の子である。

以上のことから、近世において通名に因む名付け、すなわち「家の名」の名付けは行なわれていた。「家の名」の名付けは祖名継承とも言えるため、近世において祖名継承はすでに行なわれていたと

いうことができる。しかし、家別、集落ごとに見ても近世における「家の名」の名付けは、たくさんある名付け方法の一つであった。

第二節 明治初期の「家の名」の名付け

（1）明治初期の名前に関する法令

明治期になると、これまで用いられてきた通名はいくつかの法令によつて終焉がもたらされる。それを含め、明治初頭に名前に関する法令が現代の名前の在り方を形成したことはこれまでの研究からも明らかとなっている（井戸田一九八六など）。近世に地域社会の中で「家の名」として用いられてきた通名は、明治期に入り、屋号となつていくことを前章までに明らかにしたが、その過程にも明治初期の名前に関する法令が大きく影響していた。本節ではまず、明治初期に出された名前に関する法令とそれに伴って生じた変化について述べていく。

名前に関する法令として、明治三（一八七〇）年の国名・旧官名を通称に持つことを禁じた太政官布告がある。それは次のようなものであった。

明治三年十一月十九日 太政官布告

国名並二旧官名ヲ以テ通称ニ相用候儀被停候事

武士が実名とは別に日常に用いられる通名には、国名や旧官名が多く用いられていた。先述の通り、それは武士の通名に限らず、百姓や町民の名前にも広く使用されていたのである。旧官名とは、かつての律令制における官職の名前のことをいう。例えば、源右衛門、市左衛門といった衛門名は衛門府の官職名に由来し、勘兵衛、九兵衛といった兵衛名は兵衛府の官職名に由来する。また、助、介、佑、丞、大夫、佐、進、藏なども官職名である。本来は官職にある者が名乗る名前であったが、これらが官職名であるということが忘れられ、通名に用いられるようになったと考えられている〔井戸田一九九三、二一七〕。

明治二（一八六九）年七月に官制の大改革が行なわれ、職員令に基づく官職名が制定された。当時、官員の名前は苗字と通名で表す風習があり、衛門・兵衛などの旧官名を通名に用いると、在官者の官名か、官に関係のない名前なのか紛らわしいこともあり、明治三年に旧官名の使用は禁止となる〔井戸田一九九三、二二〇～二二一〕。しかし、衛門名や兵衛名など官名が多く使われた苗字にも実名にも匹敵する通名しか持たなかった庶民においては、改名を余儀なくされた。

A地区においても例外ではなく、名前に旧官名を含む者は改名を

行なっている。慶応四（一八六八）年の宗門人別帳には、後年に改名後の名前が加筆されており、九一名の戸主名のうち、七〇名分の戸主の新旧の名前を読み取ることができる。また、四一名分の戸主以外の改名についても記されている。戸主の改名について、井戸田は「省略型」「頭字利用型」「文字変更・音訓同一型」「別名型」「無修正型」と五つに分けて分類を行なっている〔井戸田一九九三、二三五～二三六〕。

A地区の場合、国名・旧官名を通名に含み、改名を行なった者は、慶応四年宗門人別帳に記載された名前全体の七七%にものぼった。近世初頭から代々受け継がれてきた通名はここにおいてひとつの終焉を迎えたと言えよう。

そしてつぎに明治四（一八七一）年に公布された戸籍法、いわゆる壬申戸籍とそれに関連した明治五（一八七二）年の改名の禁止である。

明治政府は、近代的な中央集権国家実現のため、国民すべてを氏と名で掌握することが必要であった。そこで明治四年に戸籍法（壬申戸籍）が公布され、翌五年から施行される。これは、生死等の身分事項を登録するとともに、徴兵、徴税、治安警察などのための行政的戸籍の面を持ち、全国民を把握統制するための国家の基本帳簿とされた〔井戸田二〇〇三、八九〕。これに先立って、明治三年に苗

字許可令が出されており、これまで苗字を名乗ることができなかった庶民レベルまで苗字を持つことが許されている。しかしながら、これは苗字を持つことを許可したものであったため、明治九（一八七六）年には苗字を必ず名乗るようにという苗字必称令が出された³。これらの法令によつて苗字を持つということが地域社会において認められると、通名は苗字の代わりを担うという役割を事実上失うことになる。そこで、通名は失われてしまうかと思われたが、「家の名」として非公式な名前で記されることのない屋号へとその形を変化させていく。

そして明治五年には、

太政官布告二三五号

華族ヨリ平民ニ到ル迄、自今苗字名並屋号共改称不相成候事

但、同苗同名ニテ無余儀差支有之者ハ、管轄庁へ可願出事⁴

との布告が出され、戸籍に登録した名前を改名することが禁止された。戸籍を有効にするために、自由に改名することが禁止されたのである。これにより、原則改名が禁止され、これまで行なってきた家督相続に伴う襲名による改名も禁止された。

明治三年の国名・旧官名の禁止はほとんどの戸主がそれまで使用していた名前を変更せざるを得なくなる。しかしA地区の場合、改名した九〇％が全く別の名前にするのではなく、太郎兵衛が太四郎、

源左衛門を源次郎、清介を清八といったように、頭字を利用した名前や、市左衛門が市才茂、卯兵衛が卯平となる音訓はそのままに文字の変更を加えた名前や衛門名の音訓を残している名前など、通名の一部を残して改名を行なっている。そして、改名を免れた者も明治五年の襲名の禁止によつて通名を受け継ぐことができなくなった。以上が明治初期に出された名前に関する法令と個人名の変化である。これらを踏まえたうえで、近代の「家の名」の名付けについて見ていきたい。

（２）戸籍簿にみる子どもの名前

まず、「明治四年戸籍簿」から集落内における子どもの名前を見ていく。「明治四年戸籍簿」は、壬申戸籍にともなつて作成されたと考えられる。内容は番号、職分、苗字、名前、年齢が記されたものとなっている。ここに記載されている名前は明治三年の国名・旧官名の禁止に基づき、戸主名は通名ではない。しかし、「明治四年戸籍簿」に記された名前のうち、多くは明治以前に出生した人であるため、ここに見える「家の名」の名付けはすなわち通名に因む名付けと言ふことになる。なおここで言う子どもも、戸主、父、伯父、戸主の兄、戸主の弟を除く男の子を指す。

「明治四年戸籍簿」には、家数一〇三軒、男性二四一名、女性二

表4-4 明治4年戸籍簿にみる子ども名前

	個数		軒数	
男の子の名前	103	100.0%	63	100.0%
「家の名」にちなんだ子どもの名前	11	10.7%	11	17.5%
干支にちなんだ子どもの名前	13	12.6%	12	19.0%
長寿の生き物にちなんだ子どもの名前	7	6.8%	6	9.5%

六九名、計五一〇名の個人名を見ることが出来る。このうち、男の子の名前は一〇三名あり、「家の名」の名付けによる名前は一名であった。その割合は一〇・七％と決して多くない。家数別に見てみると、男の子がいる家は六三軒であり、「家の名」の名付けによる名前は一名であったため、割合は一七・五％となる（表4・4）。ちなみに、干支に因む名前は一名、鶴や亀といった長寿の動物に因む名前は七名となっている。「文化一一年宗門人別帳」と比較してみると、多少の増加は認められるものの、ここでもたくさんある名付け方法のひとつとして「家の名」の名付けが行なわれていたという程度と考えられる。また、「家の名」の名付けによる名前一名のうち、一〇名は長男であった。

「明治四年戸籍簿」では近世にみるものが出来なかった名付けが見受けられる。それは、国名・旧官名の禁止によって改名した戸主の名前と子どもの名前の一字が同じという例であり、それは三名あった。平左衛門という通名から彦七に改名し、その子どもが彦吉という具合である。子どもの名前は通名の改名以前に名付けられたものであるため、通名の改名によって

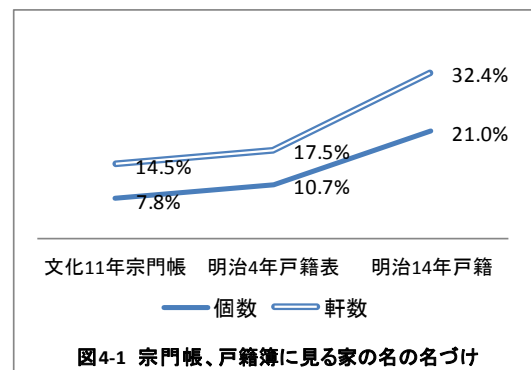


図4-1 宗門帳、戸籍簿に見る家の名の名づけ

親子の名前の一字が同じとなったと言える。これに「家の名」は関係ないものの、国名・旧官名の禁止によって通名が改名されたことで生じた事例である。

続いて「明治一四年戸籍簿」を見ていきたい。「明治一四年戸籍簿」は、家数一三一軒、男性三八名、女性三八二名、計七六〇名の個人名が見える。このうち、主、父、伯父、戸主の兄弟を除く男の子の名前の総数は二一四名、うち「家の名」の名付けによる名前は四五名ある。その割合は二一・〇％となり、中には「家の名」をそのまま名付けた名前が六名あった。家数別に見ると、男の子のいる家は一〇五名あり、そのうち「家の名」の名付けによる名前は三四名、三二・四％に上った。個数別、家数別ともに、「明治四年戸籍簿」と比べて、倍増していることがわかる（図4・1）。また、干支に因む名前は一五名、鶴や亀といった長寿の動物に因む名前は一二名あるので、「家の名」の名付けによる名前の多さがわかる（表4・5）。

「明治一四年戸籍簿」は、先述した国名・旧官名の禁止、改名の

表4-5 明治14年戸籍簿にみる子どもの名前

	個数		軒数	
男の子の名前	214	100.0%	105	100.0%
「家の名」に因んだ子どもの名前	45	21.0%	34	32.4%
祖父・父の名に因んだ子どもの名前	10	4.7%	9	8.6%
干支に因んだ子どもの名前	15	7.0%	15	14.3%
長寿に因んだ子どもの名前	12	5.6%	12	11.4%

表4-6 宗門帳、戸籍簿に見る家の名の名づけ

		個数	軒数
文化11年宗門帳	男性名	102	55
	通名にちなんだ子どもの名前	8	8
	割合	7.8%	14.5%
明治4年戸籍表	男の子の名前	103	63
	家の名にちなんだ子どもの名前	11	11
	割合	10.7%	17.5%
明治14年戸籍	男の子の名前	214	105
	家の名にちなんだ子どもの名前	45	34
	割合	21.0%	32.4%

* 子どもとは、戸主、父、伯父、戸主の兄、戸主の弟を除く男の子

表4-7 出生年別にみた家の名の名付け(明治14年戸籍簿)

	個数	割合
明治6年～生まれ	40	88.9%
～明治5年生まれ	5	11.1%
合計	45	100.0%

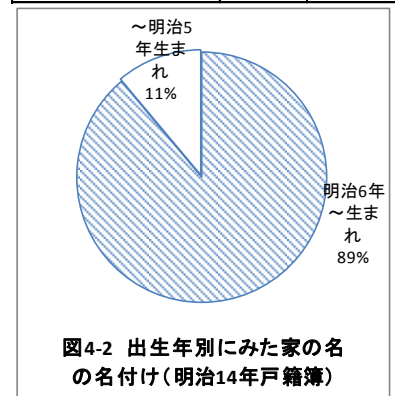


表4-8 明治6年以降生まれの子どもの名前

	個数	割合
屋号に因んだ名前	40	32.0%
父の名に因んだ名前	9	7.2%
その他	76	60.8%
合計	125	100%

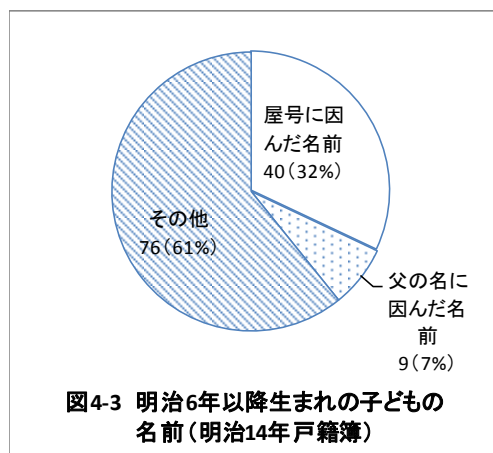
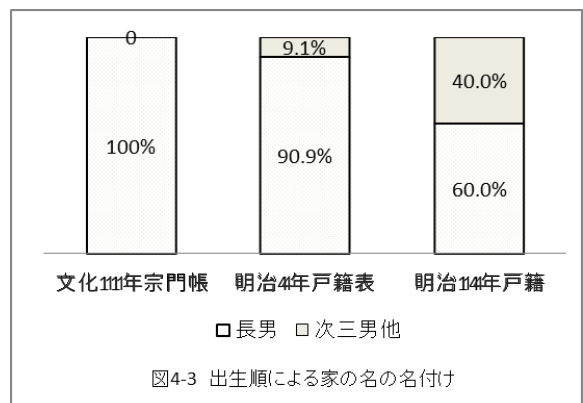


表4-9 出生順による家の名の名付け

		長男	次三男他	合計
文化11年宗門帳	個数	8	0	8
	割合	100.0%	0.0%	100.0%
明治4年戸籍表	個数	10	1	11
	割合	90.9%	9.1%	100.0%
明治14年戸籍	個数	27	18	45
	割合	60.0%	40.0%	100.0%



禁止という法令が出されたあとの戸籍簿であるため、「家の名」の名付けによる名前を持つ四五名の出生年を見てみると、明治六年以降に出生した子どものほとんどが「家の名」の名付けによる名前であることがわかった(表4・6、4・7、図4・2)。四五名のうち、四〇名が明治六年以降に出生しており、明治六年以降生まれの男の子の名前の総数は一二五名分なので、三二%が「家の名」の名付けによる名前であった。つまり、明治六年以降に出生した男の子のうち、三名に一名は「家の名」の名付けによる名前ということになる(表4・8、図4・3)。なお、明治五年以前に生まれた男の子の名前は一〇九名分あり、そのうち屋号に因む名前は五名。その割合は四・五%なので、その多さがわかる。また、「家の名」の名付けが行なわれた長男は二七名、次三男以下が一八名と出生順に関わらず、「家の名」の名付けが行なわれていた(表4・9、図4・4)。

そして、「明治四年戸籍簿」以降見ることになる「家の名」とは関係のない父親の名前と子どもの名前の一部が共通するという名前も増加し、ここでは一〇名見ることができた。このうち九名が明治六年以降の出生となっており、長男は七名となっている。国名・旧官名の禁止によって通名が改名されたことにより、父の名の名付けともいべき名付けが新たに生じて名付けの方法のひとつとして定着したと考えられよう。

「明治一四年戸籍簿」のなかで特筆すべきは、「家の名」をそのまま名付けた名前が見受けられることである。国名・旧官名は禁止されているにもかかわらず、それらを含む「家の名」がそのまま名付けられている。国名・旧官名の禁止は、通名としての国名・旧官名の改称を命じたものであり、新たに命名することは禁止されていなかった(井戸田一九九三、二二七)。つまり、生まれた子どもにこれまで使用していた通名を名付けることは禁止していなかったのである。そのため、生まれてくる子どもへ六左衛門や与兵衛というような衛門名を持つ通名、つまり「家の名」がそのまま名付けられた。

以上に見たように、個人名であるが屋号という「家の名」の一部、もしくは全部が意識的に組み込まれた「家の名」の名付けは、国名・旧官名の禁止、改名の禁止と言った法令が大きく影響し、明治六年以降増加する。近世以来、「家の名」・個人名として長く受け継がれてきた通名を失いたくないという思いもそこにはあったことが想像される。そこで、通名は屋号となり、また生まれてくる子どもへ通名の一部、もしくは通名そのものが名付けられたのであろう。法令によって「家の名」としての通名は苗字にその役割を譲り、書き記されることのない非公式な名前である屋号となったように、個人名としての通名も「家を示すことのできる個人名」となり、「家の名」

の名付けが行なわれるようになったと考えられる。

森謙二は、一人一名主義の法制度の確立によって、新しく祖名継承の慣行が形成され、親あるいは祖父の名を一字取るというかたちで祖名継承法が行なわれるようになったが、この命名法が新しい習俗として一般化されたとは言いがたく、大方の人々に採用されたわけではないと述べている「森二〇〇六、三五八」。A地区においては、近世から祖名継承がすでに行なわれていたことを考えても、新たな命名法として展開したとは言いがたく、しかし、明治六年以降に生まれた子どもたちの三割が「家の名」の名付けを行なっていることから、襲名に代わる命名法として採用されたことがわかる。そしてA地区では、「家の名」の名付けは近代以降現在に至るまで続いており、一時的な現象とは言えない。

第三節 近代～現代における「家の名」の名付け

(1) 近代～現代の名付け

続いて明治期以降から現代に至るまでの「家の名」の名付けを見て行きたい。聞き取りを中心に、古文書や過去帳などを用いて四つの事例を見ていく。

事例① 新左衛門家

新左衛門家の近世における幼名は第一節にて明らかにしたため、その後の名前について見ていきたい。国名・旧官名禁止にあたって通名である「新左衛門」の「新」の字を取って「新太郎」と改名がなされる。そしてその子「麟吉」は改名を前提として名付けられた幼名であったため、「家の名」の名付けは行なわれていない。その子どもは「新太郎」と名付けられ、「麟吉」の祖父と同名となっている。それ以降、「新」の字を用いて代々名付けが行なわれており、それは今なお続けられている。

平成四（一九九二）年生まれの長男は、「新」の字を用いた名前が名付けられた。名付けを行なった父親自身も「新」の字を有している。名付けを行なった父親はこの家で代々受け継いできた「新」の字を男の子の名前に入れるものだと考えていたため、年配者の指示という外からの働き掛けではなく、自主的に「家の名」の名付けを行なった。名付けるにあたっては、「新」からはじまる名前をいくつか候補にあげ、最終的には字画などを考慮し、名前を決定したそうである。

事例② 源太夫家

源太夫家も同様に第一節で近世の幼名を見たが、過去帳や史料を

照らし合わせてみると源太夫家では代々嫡男の幼名は「源五郎」と称していたようである。国名・旧官名禁止により「源太夫」は元々の幼名である「源五郎」へ改名している。しかしこの「源五郎」は源太夫家へ養子に來た際「源五郎」と名前を改め、家督相続の際に「源太夫」へと改名し、そして再び「源五郎」と称したのである。その子、「源吾」は幼名を「藤吉(当吉)」と言い、国名・旧官名禁止令の際に「源吾」へと改名している。「源吾」は子どもに「源太夫」という「家の名」の名付けを行なうが残念ながら「源太夫」は早世し、養子を取る。養子は明治二八(一八九五)年に「源一」と改名した。このときの改名は役所へ改名届を出したうえのものである。そして「源一」の子は「源太夫」という「家の名」が名付けられた。「源太夫」は子どもに「源吾」と「家の名」の名付けを行なう。明治三八(一九〇五)年源太夫家の者によって記された史料のなかに、「我家ノ憲法」として、「相続人ノ名称ハ源吾、源一、源太夫ノ三世ヲ転回シテ戸主ノ名義トスベシ」とあり、これを「源太夫」が守ったことにより、「家の名」の名付けが行なわれるもそれは昭和初期までとなつてしまった。

養子に入つた者の名前を明治二八年に「源」という「家の名」を含んだ名前に改名していること、明治三八年に戸主名を「我家ノ憲法」として定めていることを踏まえると、明治後期において家督相

続者たる長男へ「家の名」の名付けを行なうことを重要視していたことが読み取れる。

事例③ 九右衛門家

九右衛門家の近世における子どもの名前は第一節で見た通り、「家の名」を取り入れるということは行なわれていなかった。近代になつて「九右衛門」は「家の名」にちなんで「九平次」と改名する。そして「藤吉」「勇吉」と続き、大正一五(一九二六)年生まれの名は「九」の付く名前が付けられた。近代以降、九右衛門家で「家の名」の名付けが行なわれたのはこの男性のみである。

事例④ 又助家

第一節で見た通り、又助家においても近世の子どもの名前に「家の名」に因むものはなかった。「又助」は国名・旧官名禁止によって「又七」と改名し、その子「甚四郎」は長男に「又次郎」という「家の名」の名付けを行なっている。「甚四郎」は改名を前提とした名前であつたため「家の名」は含まれていないが、明治一三(一八八〇)年生まれの「又次郎」は「家の名」の名付けが行なわれた。そして「又次郎」は長男に「又七」という祖父の名前を名付ける。「又七」は昭和一一(一九三六)年生まれの名前に「甚」から始まる名前を名付けた。これは「又七」の祖父である「甚四郎」から取られたのであろう。そして現在に至るまで「甚」の名が付けられている。

「又七」は「家の名」の名付けであると同時に祖父の名に因む名付けであるということが言えよう。そして昭和一一年生まれの男性も同じく祖父の名に因む名付けである。そして現在に至るまで父の名に因む名付けが行なわれている。明治期以降になつて行なわれ始めた「家の名」とは関係のない父の名の名付けが行なわれている例である。

これらの事例から、前節で明らかにした通り国名・旧官名の禁止、改名の禁止と言った法令が影響して明治六年以降、現在に至るまで代々「家の名」の名付けが行なわれてきたことがわかる。また、家督相続者たる長男へ「家の名」の名付けが行なわれており、家の継承との結びつきが見える。事例③の九右衛門家は大正末期になつて「家の名」の名付けが行なわれており、祖名継承は祖父から父、子へと継承されていく命名法とされるが、「家の名」の名付けとして考えた場合、連綿と続いていくとは限らないと言えよう。そして、事例④又助家のように、「家の名」の名付けから祖父・父の名に因む父の名の名付けへと移行していく事例もある。どちらも祖名継承による名付けには違いないが、近代における祖名継承には「家を示すことのできる個人名」が名付けられる「家の名」の名付けと、父・祖父に因む名付けが行なわれる父の名の名付けが混在するようにな

つたと言えよう。これらは近世において同じだったものが、明治期になつて通名が使用できなくなったことにより併用されるようになったと考えられる。

父の名の名付けの場合は、家のシンボルである一字や「家の名」が含まれていないため、どこの家の成員であるかはわからない。しかし、父親の名前の一字を継承するこの名付け方法もまた家の系譜を意識した名付けであると言えよう。

（２）「家の名」を名づける意味

A地区において今現在も「家の名」の名付けを行なっている家は決して多くはない。しかし、明治後期～昭和二〇年代まで、屋号に因む名前や屋号そのものを名付けることは広く行なわれていた。当時は、屋号に因む名付けをすれば家が繁栄し、名付けをしなければ家が繁栄しないとまで言われており、屋号から一字取る、屋号の名前をそのまま命名するといった「家の名」の名付けは頻繁になされていた。現在の集落全体で見ると、屋号のある家一一軒のうち、二七名の戸主が屋号に因む名前であり、全体の二四％にも上る。その多くは昭和二〇年代までに生まれた人である。

国名・旧官名の禁止以降、高い割合で「家の名」の名付けが行なわれるようになるが、そこには家の系譜を示す名前という意味があ

った。それが明治後半になると、家の繁栄のために「家の名」の名付けを行わなければならないと言われるようになったのである。このほかに三四郎家では、別の意味が「家の名」の名付けに込められている。

三四郎家では、現在も男の子には、名前に代々「三」が入る。この字を男の子の名前に入れ始めたのは、一〇代続くこの家の七代目のころで、明治期以降のことであるという。第一節で見たように近世における三四郎家の子どもの名前には「家の名」に關係する名前を見ることはできない。明治一〇（一八七七）年に誕生した「三市」が初出である。「三市」は三男で、その弟である四男は「三次」と名付けられている。

さて現在、「三四郎」家には、「三」と付く名前が名付けられた兄弟がいる。名付けは両親によって行なわれ、「み」からはじまる男の子の名前を考え、名前が決まってから漢字の意味や字画を見て名付けを行なったという。受け継ぐ字の読み方は「さん」であっても「み」であっても構わず、この場合、「三」という字が重要となる。名付け者である母親は、嫁入り前に男の子の名前には「三」という字を入れなければならないと知って驚いたそうである。しかし、「三四郎」家では、「三」の字を外して名付けた男の子は早世すると言われていることを聞き、納得したという。そして現在主流である名前の響き

を重視し、イメージや漢字の意味で名前を考えるという名付け方法をうまく取り入れた「家の名」の名付けが行なわれた。「三四郎」家では、実際の出来事として、屋号に因む「家の名」の名付けを行わなければ子どもが早世するという理由が加わっている。

以上のことから、明治期に入るまで長く「家の名」として使用されてきた通名が、名前に關する法令の影響を受けて使用できなくなり、一方では屋号として受け継がれ、もう一方では、「家の名」の名付けとして受け継がれる。そして「家の名」の名付けは明治後期になると家の繁栄という意味が付与され、さらには三四郎家のように子どもの成長祈願という意味が付与された。現在では、家の繁栄とは言わないまでも、「家の名」の名付けが、家というものを意識した名付けであり、家の存続を願う要素のひとつであると言うことができる。

第四節 「家の名」の名付けの背景にあるもの

「家の名」の名付けが明治後期から昭和二〇年代に家を意識し、家の存続を願う名付け方法として確立されていく背景について考えていきたい。

まず、歴史的な背景として、日清、日露戦争が大きな出来事として挙げられる。このふたつの戦争は、日本中の人々の生活実感を変え、国家、つまり日本という国を意識させる出来事であった。日清戦争は明治二七（一八九四）年から翌年の春にかけて起こった戦争で、清が朝鮮へ出兵したのを契機に日本も朝鮮へと出兵する。この戦争は近代日本が初めて経験する本格的な外国との戦争であった。

国家と国家の戦争は、国家のためという意識を生み出し、庶民は国民となり、国民を国家にまとめ上げる契機となる。そして国民は自らの関心を国家的な課題と一体化させていくことになる〔大日方二〇一六、二三六～二四〇〕。日露戦争は、日清戦争に勝利した日本が遼東半島を分割したことから、満州と挑戦をめぐってロシアと対立し、明治三七（一九〇四）年に開戦する。

国家、国民意識の芽生えにはもうひとつ、天皇制と教育がある。国家主義的な理念に則り、教育が軍国主義に結び付けられた。その第一が第二次世界大戦後まで続く教育勅語の発布である。明治二三（一八九〇）年一〇月三〇日に発布された教育勅語は、天皇が古来より国を統治してきたことや、国民の守るべき徳目を掲げたもので、天皇制の思想や家父長制を強制するものであったため、教育勅語の公布を機に国家主義的・保守的風潮が強まっていく。そして、天皇・皇后の御真影が全国の学校に頒布され、教育勅語謄本とともに学校

儀式施行上不可欠のものとされた。

このような背景のもと、明治三一（一八九八）年に明治民法が施行される。とくに親族法では、戸主権を中心とした家制度、戸主権および財産の全部を長男が相続する家督相続が定められた。主権国家日本を構成する単位は家であり、家の主役である戸主は主権国家の主役と定められたのである〔大日方二〇一六、二五五～二五六〕。

明治民法における家は、近世における武士の家父長制を取り入れられたものであった。それは庶民のこれまでの家のあり方と異なっており、国家権力による家への介入であった。家永三郎は、「きわめて人為的に新しく創出された「家」観念が、あたかも古代以来伝統的に継承されてきた「淳風美俗」であるかのような錯覚を多数の国民にいだかれることさえなった」とし、「近代の学校制度を媒介とすることによって、家父長家族道徳を、歴史的事実との矛盾を無視してまで、全国民の胸裡に徹底的に浸透させようと試みるにいたった」と述べている〔家永一九七四、七〕。学校教育の場においても、教育勅語をはじめ、家父長制を取る儒教的な家制度が道徳とされ、子どものころから教育されていくことになったのである。

この明治民法の家制度がすぐにこれまで地域ごとに行なわれていた家慣行に変化をもたらしたわけではないものの⁵、昭和二二（一九四七）年に改正される新民法までの約五〇年間、法制度上は続く

ことになる。

以上を踏まえて「家の名」の名付けが明治後期から昭和二〇年代に家を意識し、家の存続を願う名付け方法として確立されたことを考えると、明治民法における家制度の影響があったことは明らかである。明治初期の「家の名」の名付けは、長男に限らず次男以下の男の子にも名付けられているのに対し、明治後期以降は長男に対する名付け方法となる。明治民法に定められた家督相続者たる長男へ「家の名」を名付けることは、家の系譜を強く意識するとともに、家の継承を表わしていたのである。そのため、長男に「家の名」の名付けを行なうことで家が繁栄するという言説が生まれたと考えられる。系譜を重視した名付けという点において、どの系譜を表わしているかということが重要となり、父の名の名付けも継続して行なわれたと推測される。そして戦後、法による家制度はなくなったものの、「家の名」を継承するという意識や系譜意識だけが残り、加えて子どもの成長祈願という意味が付与され、現在に至るまで「家の名」の名付けが行なわれてきたと考えられる。

小 結

本章では、「家の名」の名付けという視点から祖名継承の再検討を行ない、近代の家意識と「家の名」について考察を行なった。「家の名」の名付けは「家を示すことのできる個人名」の名付けであり、上野が提唱した祖名継承法の父系型に当てはまる。

これまでの研究から問題点として挙げられていた祖名継承の歴史的変遷を明らかにするため、まずは近世における子どもの名前と「家の名」の名付けについて見た。近世における「家の名」は通名と呼ばれ、家督相続の際に襲名する名前である。改名を前提とする近世社会の名付けにおいて、通名に因む「家の名」の名付けは行なわれていたが、たくさんある名付け方法のひとつであったと考えられる。

明治期になると、国名・旧官名の禁止、戸籍法の制定、改名の禁止といった名前に関する法令が出され、通名の改名、襲名の禁止など名前の在り方が大きく変化する。そのような中、A地区においても大部分が通名の改名を行なっている。これらの法令により、通名は屋号に姿を変えることになる一方で、法令の出された明治六年以降、屋号という「家の名」の一部、もしくは全部を意識的に組み込んだ「家の名」の名付けが高い割合で行なわれるようになり、現在へと受け継がれていく。このころは、長男に限らず、次・三男にも「家の名」の名付けが行なわれ、明治六年以降に出生した男の子のうち、三人に一人の割合で「家の名」の名付けが行なわれていた。

また、「家の名」とは関係のない父や祖父の名前に因む名付け、すなわち父の名の名付けが混在するようになる。

近代から現在の名付けをそれぞれの家別に見てみると、明治後期（昭和二〇年代）には家督相続者である長男に「家の名」の名付けが行なわれ、家の継承と結びついていることがわかった。「家の名」の名付けに家の繁栄という意味が付与されたことにより、主に長男に対する命名法へと変わっていく。しかし、第三節で見た三四郎家の事例のように、子どもの成長祈願として長男・次男関係なく男の子へと「家の名」の名付けを行なっている家もあり、明確に長子相続のための「家の名」の名付けということはできない。家の繁栄とまでは言わないものの、家を意識し、家の存続を願うひとつの要素として「家の名」の名付けが行なわれてきたと言えるだろう。そのため、祖名継承が祖父から父、子へと継承されていく命名法とされるのに対して、「家の名」の名付けが連綿と続いていくとは限らないことも示した。また、「家の名」とは関係のない父の名の名付けが行なわれていることから、祖名継承には「家を示すことのできる個人名」が名付けられる「家の名」の名付けと、父・祖父に因む名付けである父の名の名付けがあると言えよう。父の名の名付けの場合は、家のシンボルである一字や「家の名」が含まれていないため、どこかの家の成員であるかはわからない。しかし、家の系譜を意識した名

付けであり、明治初期に出された名前に関する法令の影響を受け、明治六年以降にこれらの名付け方法が混在するようになる。

上野の定義した祖名継承は、何らかの関係にある先祖の個人名の一部、もしくは全部を継承して子どもに命名する方法であり、また、特定の先祖の名をとって子どもに命名することが正常な子どもの社会的地位を示すと考えられる命名法という点について異論はない。しかしながら、父系型の祖名継承を「家の名」の名付けという視点から再検討すると、「家の名」の名付け」と「父の名の名付け」のふたつがあると言えよう。

また、「家の名」の名付けが明治後期から昭和二〇年代に家を意識し、家の存続を願う名付け方法として確立されていく背景には、明治民法による家制度が影響していることを示した。明治民法の家制度に規定された家督相続者たる長男へ「家の名」の名付けを行なうことは、家の系譜を強く意識するとともに、家の継承を表わしていたと言えよう。そして戦後になると、この家制度は法制度上なくなるが、「家の名」を継承するという意識や系譜意識だけが残し、現在に至るまで「家の名」の名付けが行なわれ続けていると考えられる。

¹ 元文四年（慶應四年）までの烏帽子着関係史料に記載された幼名は四八〇あり、そのうち通名に関係する名前は八一あったため、一六・九％という割合になる。

² 坂田聡は和歌山県紀の川市（旧粉河町）にある王子神社に残る「名つけ帳」の分析から、中世から近世にかけて童名は動植物名から排行名へと転換していくと述べている。中世においては松や楠、鶴などの動植物名が半数を占めており、松や楠は長寿・永続性・若さの持続を表象する漢字であり、家と村の末永き繁栄を望んでつけられたとする。また排行名が増える理由としては、宮座の席次をめぐって長幼の区別をつける必要があったからではないかと推測する〔坂田二〇〇六、一二九～一三二〕

³ 滋賀県では、明治三（一八七〇）年の苗字許可令以降も苗字を名乗らない者が多かったようである。それは御趣意に反するので必ず苗字を名乗るように、また先祖以来の苗字がわからなければ新たに苗字を設けるようにとの布達が、明治五（一八七二）年と明治八（一八七五）年に出されている。第二章参照。

⁴ 明治九年太政官布告五号、明治一三（一八八〇）年太政官指令によつて、改名禁止は緩和され、同苗同名に加えて、営業の都合や由緒、その家の者の都合によつて、改名が許可される事例が増加

するようになる〔井戸田二〇〇三、九三～九四〕。滋賀県では、太政官布告が出された翌月九月に滋賀県内に通達が出されている。⁵ 法制度と家慣行の変容についての研究は数多くある〔川島一九四六（二〇〇〇）など〕。

結 語

本論では、屋号、通名、苗字を「家の名」として捉え、それぞれの関係性や個人名との関わりを分析することにより、「家の名」が地域社会の中でどのように位置づけられるのか、家意識の問題を交えながら考察することを目的に論を進めてきた。最後に再び各論をまとめたい。

第一章では、「家の名」をめぐる研究」と題して、研究史の整理を行なった。まずこれまでの屋号研究を整理し、課題を抽出した。屋号研究は一集落やその周辺地域という狭い範囲を事例とした研究が多く、さまざまな特徴を持った集落を比較研究したものはないに等しい。近江という広範囲においていくつかの異なった特徴を持つ地域を事例に取り上げ、屋号の分類を行ない、屋号のもつ地域的特徴を明らかにする必要がある。また屋号の成立について、集落内に同苗字の家が多いため、これを区別するために成立したと言われてきた。しかし、明治初期にさまざまな名前に関する法令が出され、苗字を誰もが公に使用し始めたことを踏まえて、具体的な事例や歴史的な観点を取り入れながら屋号の成立について考えていかななくてはならないことを述べた。

「家の名」は個人名に影響を与え、また個人名は屋号の生成などで「家の名」に影響を与えてきたにも関わらず、個別に研究が行われ、両者を関連つけた研究が行なわれていない。出生時の命名によって屋号と同じ個人名を持つ人、屋号に因む個人名を持つ人が少なからずおり、個人名に屋号が取り入れられている。それは祖名継承法による名付けとも言え、祖名継承研究において指摘されてきた近世から近代移行期を含む祖名継承の歴史の変遷、地域社会における祖名継承の頻度、なぜ祖名継承による命名を選択したのかを「家の名」の名付けという視点から明らかにしたうえで、家意識との関連について述べる必要を示した。

家研究は家族研究へと移行し、その家族研究でさえも近年は低迷している。その中で、近代以降の家意識について取り上げた研究は、もっぱら社会学を中心に行なわれてきた。その研究方法は家に関するさまざまな質問項目から家意識を抽出することである。これらの研究では家意識を具体的なものとして捉えておらず、抽象的なものとして捉えてきたことが指摘できる。家意識を持つ主体は誰であるのか、それは誰に対するものであるのか、また家意識は何に、もしくは誰にどのように作用するのかということが問われてこなかった。清水昭俊は、「家を包み込む外的・公的領域——同族団、親類、村落共同体、政治的・経済的体制、法等——からの規制、この規制に

相対する「制度体」〔中野 1987-81:107〕¹としての象徴的要素――家の意識、屋号、姓、家紋、祖先祭祀等々――、家の政治的、経済的、社会的機能、そしてこのような家を担う成員の構成と動態、これら家という事象に含まれる諸要素間の相互関連は、記述的な事例研究では全体にわたって取り上げられていた〔中野 1978:81、有賀 1967a〕²ものの、理論的には限られた要素間の分析的な考察に限られていて、家に関与するイデオロギー的、政治的、経済的、社会的、そして物的な諸要素間の相互関連が、全体にわたって理論化されるには至っていないように思われる。このような諸要素間の相互関連の全体を家の文化的構成と称するならば、この文化的構成が今後の家研究の主要な課題であろう」と家研究の課題を述べている。清水が述べたように象徴的家を構成する家意識ではあるが、その象徴の要素として、具体的には屋号やそれに因む名付けを挙げることが出来る。また屋号は、家の成員が抱える自家に対する家意識を対外的に表出していると推測されることから、実体のない家意識が具体的に表出されるものとして屋号を捉えていく必要があることを示した。

第二章「家の名」の成立と変遷」では、近世から近代、そして現代にかけて「家の名」がどのような歴史的背景のもと成立し、それぞれの時代でどのように使用されたのか、屋号や苗字の共通性や相

違を踏まえながら明らかにした。琵琶湖岸に位置し、農業を主としながら漁業も営まれる同苗字が多いA地区、異なった苗字の多い山村のB地区、商店が建ち並びかつて苗字に統一性があつた街道の町、C地区を事例に取り上げて検証した結果、近江における屋号の地域的特徴として、屋号は家の系譜につき、祖名屋号が主たる屋号であることがわかった。そして苗字が使用されなかった近世に、代々襲名され、苗字の働きをしていた通名が、祖名屋号の起源であることが判明した。近世における通名は、家とさらに個人を示すことができ、屋号と苗字、両者の機能を併せ持った「家の名」であつた。明治以降、苗字を持つということが地域社会において認められると、通名は苗字の代わりを担うという役割を事実上失うことになる。そこで、通名は失われてしまうかと思われたが、「家の名」として非公式な名前で記されることのない屋号へとその形を変化させた。

苗字と屋号の関係については、近代になり苗字の必称によって、新たな「家の名」が成立する。それまで重用されてきた通名／屋号に加えて、苗字も「家の名」として使用されるようになった。屋号は家を特定する役割を、苗字に譲渡することになる。苗字を使用し始めた時点で、屋号はいずれ衰退する可能性を持ったと言えよう。しかしながら、近代から現代に至る変遷過程のなかで、屋号は明らかに衰退しているものの、苗字が村落内において「家の名」として

定着していないため、A地区やB地区のように今も使用されている地域は少なくない。

第三章「家の名」の生成と継承」では、世代および男女の違いによる屋号の使用、継承方法を明らかにしたうえで、苗字という「家の名」があるにも関わらず近代以降も生み出され続けた屋号の特徴を考察し、近世から継続して使用されている祖名屋号と明治以降に生み出された屋号の違いなどを検討した。

屋号のついていない家と呼ぶときにこそ、屋号が生み出される過程を窺い知ることができると仮定し、世代の違いおよび、男女の違いによつて、屋号の使い方、覚え方について考察を行なった。その結果、屋号を覚える要因として青年組織の役職のひとつである「アルキを行なう」ことが重要であった。そして屋号が生成される要因として、会話の中で生じたという点を指摘した。すなわち、世代の隔たりによつて会話の中で戸主名の意味の錯誤、あるいは展開が起こり、それが継承された結果、新たに屋号が生成されていったと考えられる。

近代に生成された屋号について、祖名屋号の一部、職業屋号、商売屋号、地名屋号、系譜屋号のほとんどが明治から戦後すぐに誕生する。そして、屋号になりやすい名称とはその家の特徴を端的に表す名称であった。その優先順位としてニックネーム（祖名）よりも

地名や系譜、それよりも商売や職業であり、商売や職業はもつとも屋号になりやすい名称であったと考えられる。

近代以降に屋号が生み出され続けた要因としては、明治になって苗字の使用が認められても「家の名」としては定着せず、それまで使用していた通名／屋号が用いられ続ける。しかし、分家や転入した家には屋号がなかったため、新たに屋号が生み出され続けたと考えられる。戦後あたりから屋号はそれほど重要ではなくなり、新たに屋号が生成されることはなくなってしまった。

現在使用されている屋号はすべて同列に扱われているが、家を表すシンボルとしての通名を背景に持ち、近世から連続して受け継がれてきた祖名屋号と、近代になって苗字の代わりとして用いられ、家の特徴を示す職業屋号や商売屋号とは、成り立ちも性質も大きく異なる。しかし、地域社会のなかで共通の認識を持って家々を区別する名前、家の系譜を示すことのできる名前であるため、これらすべて屋号と言えよう。

第四章「家の名」の名付けと家意識」では、「家の名」の名付けという視点から祖名継承の再検討を行ない、近代の家意識と「家の名」について考察を行なった。「家の名」の名付けは「家を示すことのできる個人名」の名付けであり、上野和男が提唱した祖名継承法の父系型に近しい。

近世における「家の名」は通名と呼ばれ、家督相続の際に襲名した名前である。改名を前提とする近世社会の名付けにおいて、通名に因む「家の名」の名付けは行なわれていたが、たくさんある名付け方法のひとつであったと考えられる。

明治期になると、国名・旧官名の禁止、戸籍法の制定、改名の禁止といった名前に関する法令が出され、通名の改名、襲名の禁止など名前の在り方が大きく変化する。これらの法令により、通名は屋号に姿を変える一方で、法令の出された明治六（一八七三）年以降、屋号の一部、もしくは全部を意識的に組み込んだ「家の名」の名付けが高い割合で行なわれるようになり、現代へと受け継がれていく。このころは、長男に限らず、次三男にも「家の名」の名付けが行なわれていた。また、「家の名」とは関係のない父や祖父の名前に因む名付け、すなわち父の名の名付けが混在するようになる。

明治後期～昭和二〇年代には家督相続者である長男に「家の名」の名付けが行なわれ、家の継承と結びついていた。「家の名」の名付けに家の繁栄という意味が付与されたことよって、主に長男に対する命名法に変わっていく。家を意識し、家の存続を願うひとつの要素として「家の名」の名付けが行なわれてきたと言える。そのため、祖名継承が祖父から父、子へと継承されていく命名法とされるのに対して、「家の名」の名付けが連綿と続いていくとは限らない。

また、「家の名」とは関係のない父の名の名付けが行なわれていることから、祖名継承には「家を示すことのできる個人名」が名付けられる「家の名」の名付けと、父・祖父に因む名付けが行なわれる父の名の名付けの二通りがある。父の名の名付けの場合は、家のシンボルである一字や「家の名」が含まれていないため、どこかの家の成員であるかはわからない。しかし、父の名の名付けもまた家の系譜を意識した名付けであり、明治初期に出された名前に関する法令の影響を受けたことで、明治六年以降にこれらの名付け方法が混在するようになる。

また、「家の名」の名付けが明治後期から昭和二〇年代に家を意識し、家の存続を願う名付け方法として確立されていく背景には、明治民法による家制度が影響している。戦後になると、この家制度は法制度上なくなるが、「家の名」を継承するという意識や系譜意識だけが残り、現在に至るまで「家の名」の名付けが行なわれ続けてきたと考えられる。

以上のことから、地域社会における屋号の展開について歴史性を踏まえてその実態から分析した結果、近江における屋号の地域的特徴は家の系譜につき、祖名屋号が主たる屋号であることが判明した。そして屋号は苗字が使用されなかった近世に、代々襲名され、個人

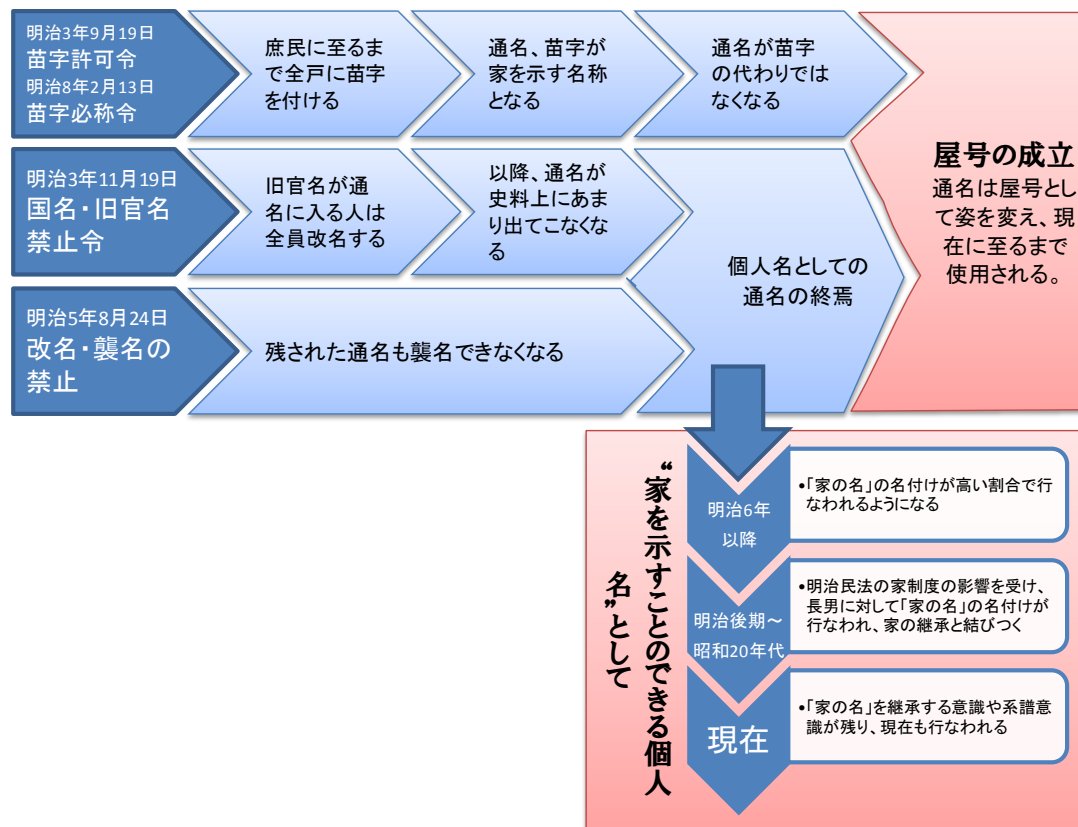


図5-1 名前に関する法令と「家の名」、「家を示すことのできる個人名」

名であると同時に、苗字の働きを有していた通名が、祖名屋号の起源であることがわかった。祖名屋号には、通名を起源とするものと、近代になってからニックネームのように生成されたものがある。通名が屋号へと変化する要因として、明治初期の名前に関する法令がある（図5・1）。

まず、明治三（一八七〇）年の苗字許可令によって庶民に至るまで、苗字を名乗ることが許され、明治八（一八七五）年の苗字必称令で誰もが苗字を名乗るようになる。するとこれまで通名を持って家を示していたのに加え、苗字も家を示す名称となる。苗字が「家の名」として浸透すると、通名は苗字の代わりを果たすという役目を失ったと考えられる。また、明治三年の国名・旧官名の禁止により、旧官名が通名に含まれるものは改名を余儀なくされ、明治五（一八七二）年の改名・襲名の禁止によって残された通名も襲名できなくなった。そこで通名は失われてしまうはずであったが、「家の名」としての通名は非公式な名前で記されることのない屋号へと姿を変える。現在では使用頻度は減少しているものの、近代以降に屋号が生み出され続けたことから考えて、苗字よりも屋号が「家の名」として浸透し、使用されていることがわかる。

「家の名」としての通名は屋号へと変化するが、個人名としての通名もまた、これらの法令によって終焉を迎え、「家を示すこと

できる個人名”へと受け継がれていく。明治六年以降、出生順に関わらず、高い割合で「家の名」の名付けが行なわれるようになり、明治後期から昭和二〇年代においては、明治民法の家制度の影響を受け、家督相続者である長男に「家の名」の名付けが行なわれ、家の継承と結びついた名付け方法となった。そして、現在では、「家の名」を継承する意識や系譜意識だけが残り、時の流行を取り入れながら「家の名」の名付けが行なわれている。

屋号は通名を起源とし、近世から近代、そして現代にいたる家の系譜を表わすことが出来るため、単なる家の呼称ではない。地域社会の中で共通の認識を持って家を区別する名前であることから、屋号を使用することで自家や他家に対する家意識が表出されるものと考えられる。屋号は家の外に対する対外的な家意識の働きを持つと言えよう。屋号はあくまでも家の系譜に対する名前であり、家族に対する名前ではないことから、家の象徴として家意識を具体的に表出するものであることは明らかである。そして、屋号は家の系譜を外へと発信するものと言えよう。また家意識を有する主体は、家の系譜であり、また「家の名」を名付けられる家の成員である。

一方で、「家の名」の名付けによる「家を示すことのできる個人名」もまた、家の系譜を表わすことのできる名前である。しかし、屋号と異なり、家の系譜ではなく、個人に対する名前であるため、対

外的な家意識は表出されず、家の系譜を外へと発信しない。しかしながら、家の系譜を意識した名前であるという点から、家族や家の成員に対して家意識が表出される。苗字の公称が許されなかった近世において、「家の名」は通名ひとつであった。現在の屋号・苗字と「家を示すことのできる個人名」双方の働きを有する通名は、家の内外に対して家意識を表出していた。そして通名が明治の名前に関する法令によつて屋号と「家を示すことのできる個人名」へ分離したことに付随して、家意識が表出される対象も家の外と内へとそれぞれ分かれることになる。「家の名」が近世における通名から近代における苗字、屋号へと変遷し、通名の「家を示すことのできる個人名」という働きが「家の名」の名付けへと変遷していったのと同様に、家意識もそれぞれに付随するように歴史的変遷があったと言えよう(図5・2、3)。以上のことから、地域社会のなかで現在その意味は薄れてしまったものの、家の系譜を表わす名前として屋号は生きていると言えよう。そして屋号からは家意識を読むことが可能であり、また家意識を具体的なかたちで表出するものとして位置づけることができるだろう。

最後に、本論の問題点と今後の課題として、次のことが挙げられる。まず、本論は近江を事例に導き出された結論であるという点である。畿内ではある程度同等の結論が導き出せると推測できるが、

日本における屋号の地域性や“家を示すことのできる個人名”の頻度を展開することができなかった。今後の課題として、他地域における「家の名」のあり方を踏まえた研究を行なうことが挙げられよう。それによって、より広義的に地域社会における「家の名」の位置づけが可能になると考えられる。また、歴史学を中心に進めら

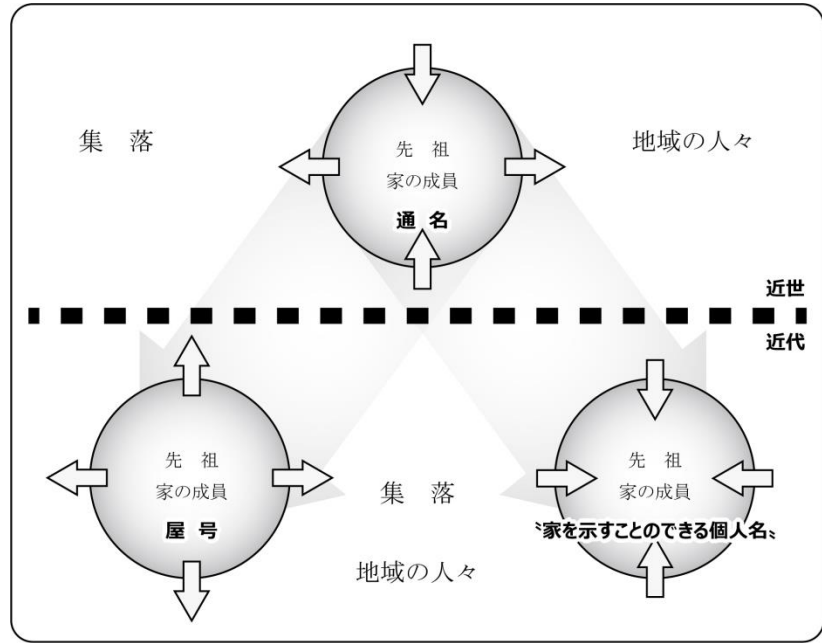


図2 「家の名」の家意識

れてきた苗字や名前研究のなかに「家の名」という分析概念を用いた民俗学視点の研究を提示することで、隣接学問領域における名前研究の発展を見ることにも繋がり、名前とは何かという根本的な問いの解決へと繋がっていくことを今後の展望としたい。

¹ 中野卓一九七八―八二『商家同族団の研究 第二版』（上・下巻）、未来社

² 有賀喜左衛門一九六七（一九三九）『大家族制度と名子制度——南部二戸郡石神村における』（有賀喜左衛門著作集 三）、未来社

主な参考文献一覧

出版部

- 赤星直忠 一九二二「屋号の話」『民族と歴史』六一六
- 有地 亨 一九七四「明治民法と「家」の再編成」青山道夫・竹田旦・有地亨・江守五夫・松原治郎編『家族観の系譜』『講座家族』八 弘文堂
- 家永三郎 一九七四「日本における「家」観念の系譜」青山道夫・竹田旦・有地亨・江守五夫・松原治郎編『家族観の系譜』『講座家族』八 弘文堂
- 石原邦雄 一九八二「戦後日本の家族意識―その動向と研究上の問題点―」『家族史研究』編集委員会編『家族史研究』第六集、大月書店
- 井戸田博史 一九八六『「家」に探る苗字と名前』雄山閣出版
- 一九九三『家族の法と歴史 氏・戸籍・祖先祭祀』世界思想社
- 二〇〇三『氏と名と族称 その法史学的研究』法律文化社
- 二〇〇六「名前をめぐる政策と法―明治前期を中心として―」上野和男・森謙二編『名前と社会―名付けの家族史―「新装版」』早稲田大学
- 岩田重則 一九九六『ムラの若者・くにの若者』未来社
- 岩本通弥 一九九八「民俗学における「家族」研究の現在」『日本民俗学』二二三
- 二〇〇二a「家」族の過去・現在・未来『日本民俗学』二二二
- 二〇〇二b「イエ」小松和彦・関一敏編『新しい民俗学―野の学問のためのレッスン26』せりか書房
- 上野和男 一九八二「日本の祖名継承法と家族―祖先祭祀と家族類型についての一試論」『政経論叢』五〇―五・六
- 二〇〇六「名前と社会をめぐる基本的諸問題」上野和男・装版』早稲田大学出版部
- 内田鉄平 二〇〇三「近世後期における村と「家」意識―豊後国日田郡五馬市村の事例より」『史学論叢』三三、別府大学史学研究会
- 大塚民俗学会編 一九七二『日本民俗事典』弘文堂
- 大藤 修 一九九六『近世農民と家・村・国家―生活史・社会史の視座から』吉川弘文館

二〇一二『日本人の姓・苗字・名前——人名に刻まれた歴史』吉川弘文館

大野 啓 二〇一三「家と家族——人と交わりの諸相」八木透編

『新・民俗学を学ぶ——現代を知るために』

昭和堂

岡野信子 一九八一「日本海中国島嶼の屋号語彙」『言語生活』三六

一九八二「屋号語彙研究ノート」『日本文学研究』一八

二〇〇五『屋号語彙の開く世界』和泉書院

荻沢明雄 一九七四「東祖谷山村の屋号について」『日本民俗学』九

一

大日方純夫 二〇一六『主権国家』成立の内と外』『日本近代の歴史』二二 吉川弘文館

史』二二 吉川弘文館

柿本雅美 二〇一二「近代における屋号の生成」『京都民俗』一九

二〇一三 a 「家の名」としての屋号の成立と変遷——近

江の事例を中心に』『比較日本文化研究』一

六

二〇一三 b 「家の名」としての屋号」八木透編『新・民

俗学を学ぶ——現代を知るために』昭和堂

二〇一四 a 「名前と屋号」民俗学事典編集委員会編『民

俗学事典』丸善出版

二〇一四 b 「子どもの名付け」民俗学事典編集委員会編『民俗学事典』丸善出版

二〇一四 c 「名付けのかたち——家の名を継ぐ」安井眞

奈美編『出産の民俗学・文化人類学』勉誠

出版

二〇一八「家の名」の名付け——祖名継承の再検討——『京

都民俗』三五

風早八十二 一九四四『全国民事慣例類集』日本評論社

柏熊岬二 一九六〇（二〇〇八）「家の意識」『現代家族の研究——実

態と調整——』弘文堂

梶田純子 一九九五「屋号について」『関西外国語大学研究論集』六

一

二〇〇三「日本とバスクの家名比較」屋号と「家の名」

について』『比較日本文化研』七

加納亜由子 二〇〇八「近世後期農村における改名慣行と結婚と」『家

意識』広島史学研究会『史学研究』二六一

川島武宣 二〇〇〇『日本社会の家族的構成』岩波書店

滋賀県市町村沿革史編さん委員会

一九六二（一八八一）「滋賀県物産誌」『滋賀県市町村沿革

史』五

- 一九六四『滋賀県市町村沿革史』一
- 清水昭俊 一九八七『家・身体・社会—家族の社会人類学』弘文堂
- 杉村孝夫 一九七七『屋号の命名法と型の用法』『ことばと文化』(『日本語と文化・社会』三)三省堂
- 竹田 旦 一九七〇『「家」をめぐる民俗研究』弘文館
- 田中宣一 二〇一四『名付けの民俗学 地名・人名はどう命名されてきたか』吉川弘文館
- 玉野井麻利子 一九八五『日本農村地帯における「屋号」研究の可能性』『民族学研究』四九—四
- 柄澤行雄 一九九二『家意識—高橋明善・蓮見音彦・山本英治編『農村社会の変貌と農民意識—30年間の変動分析—』東京大学出版
- 張 相彦 一九九一『家称名—日本の屋号・韓国の宅号』『日本語学』一〇—六、明治書院
- 豊川 武 一九七一『苗字の歴史』中央公論社
- 鳥越皓之 一九八五『家と村の社会学』世界思想社
- 内閣官報局編 一九七四(一八八九)『法令全書』五一—原書房
- 中込睦子 一九九七『家族と世帯』福田アジオ・赤田光男『社会の民俗』(『講座日本の民俗学』三)、雄山閣出版
- 二〇一四『家族・親族』『日本民俗学』二七七
- 永田メアリー 二〇〇六『改名にみる家の戦略と個人の挑戦』落合恵美子編『徳川日本のライフコース—歴史人口学との対話—』ミネルヴァ書房
- 中野 卓 一九七八—八二『商家同族団の研究 第二版』(上・下巻)、未来社
- 日本民族学協会編 一九五二『日本社会民俗辞典』第一卷 誠文堂新光社
- 野口道彦 一九九六『家意識と結婚忌避』『同和問題研究 大阪市立大学同和問題研究室紀要』一六
- 早川孝太郎 一九三一『家名のこと』『民俗学』三一—二二
- 原田敏明 一九二八『命名に就て』『民族』三一—六
- 檜垣巧 一九八三『対馬三部落における「家」意識の調査研究』『密教文化』一四二
- 福田アジオ・湯川洋司・中込睦子・新谷尚紀・神田より子・渡辺欣雄編 一九九九『日本民俗大辞典』上、吉川弘文館
- 洞富雄 一九五二『江戸時代の一般庶民は苗字を持たなかったか』『日本歴史』五〇
- 松井健 一九九七『分類と命名』『月刊言語』二六—四
- 宮本常一 一九八四『忘れられた日本人』岩波書店
- 最上孝敬 一九三七『家号と木印』柳田國男編『山村生活の研究』

民間伝承の会

森 謙二 二〇〇一「家（家族）と村の法秩序」水林彪他『法社会

史』（『新 体系日本史』2）山川出版社

二〇〇六「名前の近代化―襲名から一人一名主義へ―」

落合恵美子編『徳川日本のライフコース―歴

史人口学との対話―』ミネルヴァ書房

森岡清美 一九八〇「戦後の家族構成の変化と家意識の崩壊」『歴史

公論』六一―

八木 透 二〇〇六「祖名継承研究の意義と課題」上野和男・森謙

二編『名前と社会―名付けの家族史―』〔新装
版〕早稲田大学出版部

柳田國男 一九六九（一九二九）「家名小考」『家閑談』（『定本柳田

國男集』一五 筑摩書房）

一九六九（一九四六）『家閑談』（『定本柳田國男集』一五、

筑摩書房）

山口幸洋 一九五八「あだ名で呼び合う町」『言語生活』八五

山口彌一郎 一九三七「屋号による聚落の一考察―岩手県九戸郡宇

部村久喜―』『地理学評論』一二―六

一九四三「北上山地の屋號と聚落」『民族學研究』八

吉田竹也 一九八八「今日の祖名継承法―沖永良部島一村落におけ

る「ナーチキ」をめぐる―』『民族學研究』

五三―二

米村千代 二〇一四『「家」を読む』弘文堂